

一産業 よりよいくらしをめざして

◆農業（米づくり）

冬には三メートルも越す積雪となるこの地方の主な産業は米づくりであった。しかし、一戸一町歩にも満たない田んぼから得る収入では生活ができず、春から夏には「かいこおき」、冬場は山に籠つての「炭焼き」や藁仕事など一生懸命働いた。

昔を知る人たちはこの土地での米づくりを「実りも少なく、なかなか容易でなかつた」と打ち明ける。農作業のほとんどが手で行われていた時代、秋に稻穂がたくさん付くよう神に祈るしかなかった。

◆農作業歳時記

重なるように見える小さな田んぼが、一面に水をたたえて鏡のように輝く六月、青々と伸びた稻の中でもくもくと草取りに精を出す七月、金色に色づいた稻穂が秋風にそよぐ九

月、収穫された稻がハセに掛けられて見事に並ぶ十月……。米づくりが人の手で行われていた時代、季節のめぐりに合わせて移り変わる原風景は、この地域一帯で目にすることができた。米づくりで得る収入が家々の生活と食を支える柱であり、春か

近世以前には、自給自足が基本で、生活に必要なものは栽培したり、山から取つたりしていたが、次第に貨幣経済の中で、収入を得ることが必要になり、生産物や、交通、宿泊などのサービスを通じて収入の増加を図るようになっていく。また、よりよくらしのために学校教育や社会教育、文化などにも気を遣うようになり、安心して生活するために、信仰や決め事などを通じて地域共同体の永続を願ってきた。

ら秋まで続く農作業を中心人々のくらしが営まっていた。

機械化前の米づくりの「作業」と

「行事」を、月ごとに記してみよう。

●一月
【野のはじめ】（行事）
米づくりの始まりは十一日に行われ



圃場整備後の市野々（平成3年）



圃場整備後の下叶水（平成3年）

る「野のはじめ」の行事である。この日から秋の収穫、そして十二月のことおさめまで続く。

堆肥を藁で包み、三ヶ所をしばつて松葉、昆布をつけたものを、方角のよい田んぼに運び、明けの方に向けて降ろす。またこの日は、ことしの稼ぎ始めとして朝仕事に「つながい」結びをした。

【だんごさし】(行事)

小正月の行事で十五日の夜「ミズフサ」の木を柱に結わえ、手で丸めただんごを茹でて枝にさす。その他に「米穂」「まゆ玉」「栗穂」を飾り米や蚕の豊作を願つた。



だんごさし



さつき(下叶水・昭和62年頃)

十五日、「野のはじめ」で雪の上に堆肥が撒かれた田んぼに今度は苗を植える。豆がら・藁・おのがらを東ね苗に見立てたものを十二束(毎年には十三束)みんなで植えた。

【とりおい】(行事)
「さつき」で植えた田んぼが鳥や害虫の被害に遭わないことを願つて行われる行事。十六日の朝早く子どもたちが昨日植えた田んぼへ行つて、鳥が来ないよう追う。

【道具の歳とり】(行事)
農作業に使う鋤や鎌などの道具に感謝し、大事に扱い長持ちを願う行事

事。米びつの傍に臼を逆さにして置きその上に鋤や鎌を載せ供養する。

●三月 【肥引き】

まだまだ田んぼには雪が残つている。その雪を利用して春一番に行われるのが「肥引き」である。田んぼに入れる唯一の肥料である堆肥を家の肥塚からソリで運ぶ仕事で、降雪も落ち着き春の息吹が何となく感じられる時期に始める。

【お田の神さま】(行事)
十六日は、炭焼きや木切りなどの仕事の安全や山を守つてくれた山の神が、今度は田の神に替わる日である。

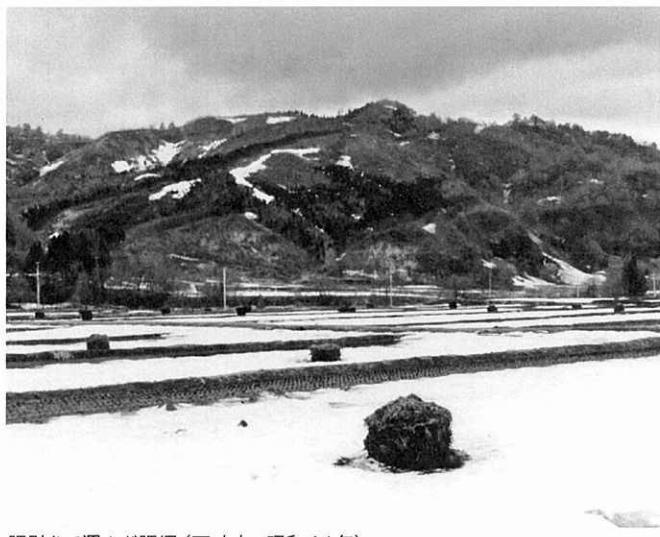
【お田の神さま】(行事)
「お田の神さま」に大きな「田の神だんご」を十六個作つて供えた。

【藁仕事】
主な「藁仕事」は供米用の米俵、機俵(さんだわら)や荷蓑(にみの)、毛蓑(けみの)、筵(むしろ)、供米用の玉縄(三分)、自家用玉縄(二分五厘)、「じんべ」を作成。

米俵は藁を揃えながら編むので、一日三枚がやつと、午前中に一枚、午後一枚、「夜わり」に一枚を作る。機俵(さんだわら)は一日に四十枚作り、筵(むしろ)は「杼取り」と「さんご差し」と夫婦二人掛けの大仕事で一日三枚がやつと、十枚仕上げるのに四日間はかかり「八人手間」である。こうして使う藁は、長めで色の良いものを脱穀した時に選び積んで置き、使うときにつぐる。そのとき出る屑藁は、廐の敷藁に入れてやる。



肥引き(市野々・昭和30年代)



肥引きで運んだ肥塙（下叶水・昭和41年）

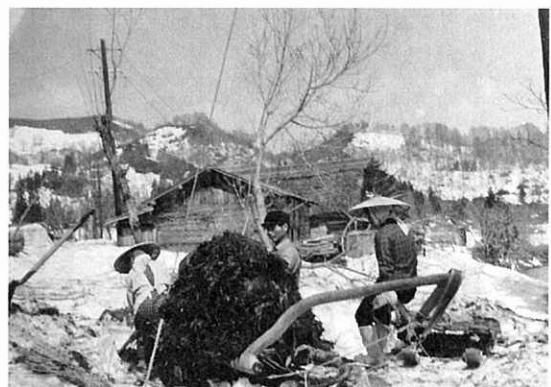
次に家の肥塙から、田んぼまでソリの道を「かんじき」で踏み固めて作る。春先になると雪は締まり、平坦地は道形さえ付ければいいが、「やまだ」まではたいへんであった。吊り橋を渡るときはその都度雪を敷く。一日運ぶと道が傷み夕方修繕を行つた。

「肥引き」用のソリは小さく、荷台は茅を編んで枠を作り前後に積荷を押さえる繩がついている。ソリに「かたつな」を付け一人で引く。子どもは後ろから「まつたぼう」で押す。堆肥は家で飼っている牛一頭が一年間に作ったもので、押し重なつて重くなっている。畑に使う分を少し残し田んぼに引いた。

耕地が少なく、山の上に少しでも平地があり水が確保できれば、田んぼを起こした。そこを「やまだ」と呼んだ。ソリが行けないところは、雪が消えてから堆肥を干して軽くし東ねたものを肥背負い籠に入れ背負つて運んだという。また、大きな面積の「やまだ」には、運ぶのがたいへんで、夏の間そこに牛を飼つて堆肥を作る場合もあった。

「肥引き」は重労働で腹が減る。

一服には「こじはんもち」など十分



肥引き（下叶水・昭和30年代）

腹の足しになるものを食べる。

彼岸も過ぎると気温も上がり山のあちこちから地肌が見えてくる。土手や堀に雪があるうちに「肥引き」は終わらせなければならない。人手の足りない家では他人を頼んだ。

●四月

【苗代の準備】

山に地肌が見え始めブナが芽吹く頃になると、農家は急に忙しくなる。四月の下旬には種を蒔かなければならぬので、苗代の雪消しにとりかかる。最初は、太陽の熱を吸収するよう、「あく（灰）」や「くん炭」、秋にとつておいた土を苗代の上に撒く。それでも解けない場合はスコップで掘るしかない。わた雪が締まつてスコップの刃が立たず、大きなコギりで挽いて掘ることもあった。

苗代の条件として、早い時期に雪が消え水が確保できること、そして田んぼは浅いほうが良かつた。

苗代は雪が消えると堆肥を撒いて鍬で起こす。次に鍬でこぎり、十分水を張つて代かきをした後に「えんぶり」をかける。さらに平らにするため、畦に立つて板ならしを行う。しばらくして濁つた水が澄むと、準備は完了である。

一、冬仕事に藁で編んでおいた「た

このような水苗代は遠い昔から行

われてきたが、昭和三十年代になると保温折衷苗代が普及してきた。これは苗代の水を落とし短冊形に畝（うね）を作りそこに芽出しをした

種枠を蒔いて糞殻のくん炭をかけ、その上を保温紙で覆い裾は土で押さ

える方法で、周りに雪があつても種蒔きができるし、発芽が揃うまで油紙で覆うことによって温度を高めて生長を促し、霜から防ぐなど画期的

な技術であった。さらに進歩して苗を畑のビニールトンネルで育てる畑苗代が普及したのも昭和三十年代後半で、丈夫でしかも早く苗ができるようになり、田植えの時期が早まつた。また、その頃から化学肥料も普及し始め、安定多収穫へとつながつていった。

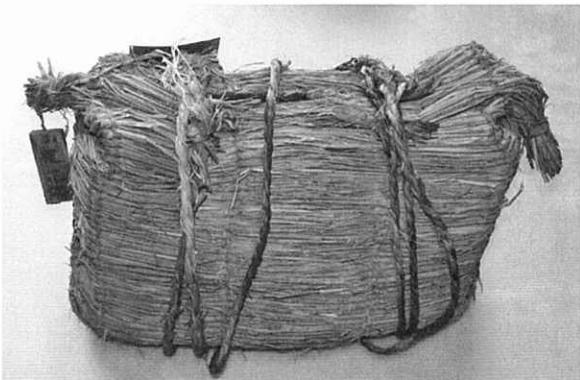
【種枠の準備】—種枠の芽出し—

苗代の準備とともに種枠の芽出しが始まる。昨年収穫した中から良いものを選び、小屋の「えり」に保管しておいた糞を使う。秋の収穫に大きな影響を及ぼす芽出しは、大事な仕事である。芽は揃つているか、死祿はないかなど慎重に選び浸す湯の温度や時間にも気を遣う。

▼芽出し作業を順に掲げる。

一、冬仕事に藁で編んでおいた「た

を十分にかけ板と石でしつかりと押さえる。



たながっこ

これは、糲に熱を持たせ発芽を容易にするため、時々糲の状態を観察し温度管理に気を遣つた。重石を載せ過ぎると糲を焼いてしまう。芽出しは決して焦るものでなく、経験と勘による難しい仕事であつた。

昭和十二年頃から「土もやし」といって、土穴を掘つて藁を敷き、「たながっこ」を入れるようになつた。土の中は保温がよく失敗が少なかつた。また、牛の堆肥の上に載せ、酸

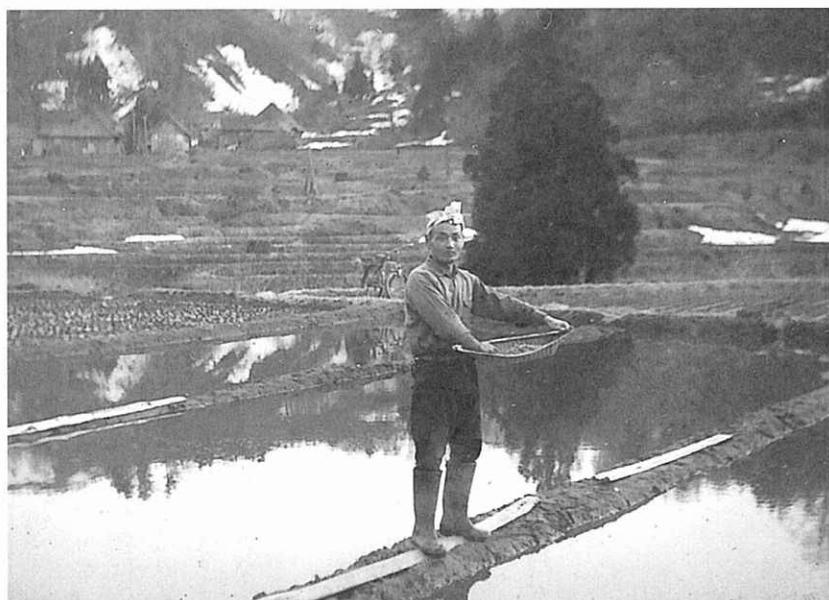
酵熱を利用して芽出しをする家もあつた。

【種蒔き】

水を張った苗代に、芽出しを終えた種糲を蒔く。ザルに入れた種糲を畦畔から手で蒔くのだが、芽を折らないように気を遣つた。また、ムラのないように蒔くのも技術がいる。

蒔いた後は、根付きが良くなり、流れたり鳥に取られたりしないよう、網が筒状になった「ころがし」を転がして土中に押し付けた。

種蒔きは、山桜の咲き始める四月



水苗代の種蒔き (昭和38年)



折衷苗代 (下叶水・昭和40年代)

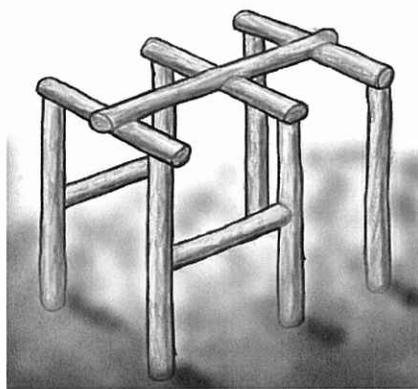
ながっこ」（種糲を萌やすかご、芽出し用に作られた四角い入れ物で幅一尺三寸、高さ一尺位）に一斗の糲を入れて、池に二週間位浸けておく。二、池から上げ立てておき、水を切る。次に風呂桶をきれいに洗つて湯を沸かし、大きな「はんぎり」（直径一尺五寸）二尺八寸位の丸い木の桶）にそのお湯を移す。

「はんぎり」に、水を切つた「たながっこ」を入れ十分に温める。お湯がぬるくなつたら上げる。

三、「とおり」の隅に藁を敷いて「藁床」を作り、お湯で温まつた「たながっこ」をその上に並べ、さらに藁

の終わり頃から始まつた。蒔く時期の判断も重要で、市野々ではお不動さまへ行く途中に「種蒔き桜」と呼ばれる桜の木があり、その花が咲くのを目安に種糲を蒔いた。下叶水にも同じように「種蒔き桜」があつた。

苗代は田植えが終わると、普通の田んぼとして使うが、苗の数を少なく植えた。また、その時期になると鯉の幼魚を売る行商が来る。それを買って苗代に放して秋まで飼い結構大きくなつたものを池に放した。鯉は二~三年飼つて正月や祝い事に



つくらい場のヤグラ



馬耕かけ(下叶水・昭和40年)

使つた。また、田の畔には大豆(青ばた)を蒔いて枝豆や大豆を収穫した。

このように、苗代も有効活用しながら、来年のことを考へて何もせず、「かつちき」といつて「みねつぱり」や「サク」を一尺位に切つて水の張つた苗代に放り込み、腐るまでそのままにする農家もあつた。これは雑草など害虫がつかないようにするためであつた。

肥ちらし

苗代の種蒔きが終わると、いよいよ本田の作業が始まる。その年の雪の消え具合が、作業に大きく影響する。

本田の最初の作業は、春先に家の肥塚から「肥引き」で運んでおいた堆肥を、まんべんなく撒き散らすもので、三人が一組になつて行うと効率がよい。ソリで運んで丸く積んである肥塚の上に一人が乗り、フォークを使って二人が背負つた「肥背負籠」に入れる。それを田んぼのあちこちに撒く。

そのようにして撒いた肥を今度は手で細かく裂き、ムラなく散らした。化学肥料のなかつた時代は堆肥が唯一の肥料であり大事に扱つた。

【牛馬繕い】

四月になると、春作業に入る準備として「牛馬繕い」を行う。牛馬は春作業の「馬耕かけ」や「しろかき」に使う重要な労働源である。

「牛馬繕い」とは、牛馬を「つくらい場」につれて行き、爪を切つたり健康状態を診察してもらうなど、作業を前にしての健康診断と身繕いのことである。

大正十年(一九二一)四月十六日の市野々大字総会では、「牛馬つくらい年三回とする。春季・夏季・秋季に之を執行すること、賃および臨時雇上げの報酬として獸医雇上分は一戸につき、一ヶ年玄米二升を支払うこと……」が決議された。当時の加入者十七名、雇い上げ獸医二名であった。

「つくらい場」に牛を押さえるために建てるヤグラは、直徑六寸五分八寸位の栗材を六本使い、土台を地中に二尺位埋めて高さ七尺位の柱を立て、上と脇を柱で組み合わせたガッシリした枠で、そこに牛を入れ押さえて爪を切つた。牛を結わえる縄は「つくらい縄」といい、前の晩に絞つた。牛はほとんどの家に一、二頭飼われていた。

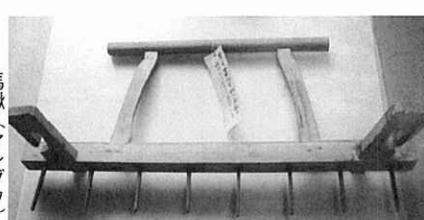
●五月

【田うない】

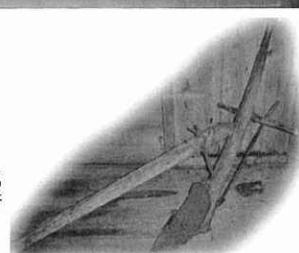
「肥ちらし」が終わり肥料が入ると、「田うない」が始まる。昨年秋の稻刈り跡の「いなし株」が立つている田んぼを、鍬を使って起こしていく。

昭和二十年代までは田や畑に使う道具といえば鍬だけであった。その後、三本鍬や四本鍬が入ってきて能率がよくなつた。むかしは湿田が多く雪で固められ粘る土を起こすのは力とコツがいる。

昭和二十年代の後半になると、馬耕(ばこう)という牛に引かせて田を耕す機械が導入された。最初は集落に一台入り共同で使つた。仕事がはかどり楽になつたが、山の上や小さな田んぼには使えず、まだまだ苦



馬耕(マンガク)



馬耕

労は続いた。

非農家や早く終わった農家は、手間稼ぎに行つたり請け負つた者もいた。請負つた分を早く終わらすことを「ぶちあがり」といってあがつてよい。一日一反分うなうと一人前であつた。

【田こぎり、代かき、くろぬり】

田うないが終わると、いよいよ田植え前の仕上げである。まず田んぼに水をかける。市野々・下叶水は水の条件が悪く、田植え時は一齊に使ふので調整がたいへんであつた。

昭和三十四年五月三十日役員会において、「田植方の水利問題について、総会にて決定するも必要な場合

は区長に於いて応急に昨年同様水番を付けること〈春水は午前四時～午前八時、午後五時～午後九時〉〈田水は上通昼、中通夜〉と厳しく取り決められた。

「田こぎり」は、鍬を使って「こぎる」(粗い土を細かく碎く)ことで、「いなし株」がごろごろしている田んぼを細かくする仕事は、腰を曲げてしかも鍬を強く振り下ろすので腰がたいへん疲れる。また、泥田に鍬をたてると泥水がバシャバシャ顔に跳ねた。跳ねない方法として、「てんでら」といつて鍬の柄の根元(柄

年代になると牛に「サイドキ」を引かせるようになった。

「代かき」は、田植え前の仕上げ

作業で、「田こぎり」が終わった田

んぼに十分水を張り、牛を使って馬

鍬を引かせる。二人一組になつて牛

を操るが、田んぼの様子を見ながら

牛のハナカンの先につけた「させさ

お」を持つて先導する者を「させど

り」とい、牛の後ろから馬鍬を押

さえる者を「まんがんおし」といっ

た。「させどり」はたいへんな仕事

であり、「さなぶり」のとき「たわら

を「俵とホウノキの葉で包んだニシ

ンをもらえた。

牛を使っての代かきは早くから

導入されていたが、それでも「や

まだ」や小さい田んぼは牛を入れず

「くわじろ」といつて、鍬を使い手

工夫した。「田こぎり」も昭和三十

つほの少し上)に「またたび」を編

んだ網(五寸四方角ぐらいで中央に

柄を通す穴を開けた)を取り付けた

り、藁を束ねたものや杉葉を結んで

人前といわれた。

作業で代かきを行つた。

「くろぬり」はうない終わった田

んぼに水を回して、ネズミやモグラ

があけた穴や人が歩いて傷んだ畔

(くろ)を修繕する仕事である。鍬

を使い表面の薄皮を剥いで「畔皮切

り」、その跡に泥を丁寧に貼り付け

ていく。稻の生育は春の水温をいか

に高めるかが大事で、畔から水が漏

れないよう水持ちを良くするため

の大切な作業であった。田んぼが小

さく畔の数が多いし、冷たい水に浸

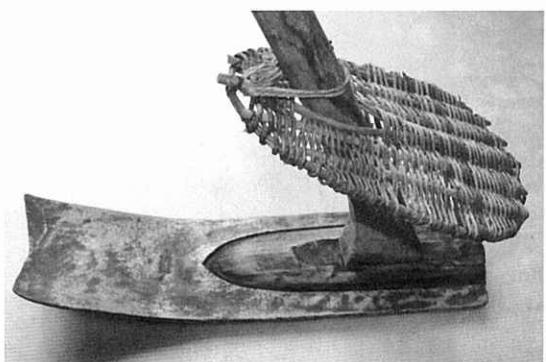
かつて腰を曲げて行うこの仕事は重

労働で、「くろぬり」をこなすと一

くろぬりが終わったやまだ
(市野々・昭和36年)



代かき(昭和36年)



てんでら付き鍬



●六月

【さつき】

—田植え—

苗代に蒔いた苗も大きくなり、本田の代かきも終わり、辺り一面が水を張った田んぼで光り輝くと、いよいよ春の最大行事である「さつき」が始まる。

暦を見て、大安など縁起のいい日を選んで始めた。最初小さな田んぼに植え初めをして祝う行事の「田植

式」を行う。その日の夕食には「あずきまま」を炊いて、花がかかるよう（穂がたくさん実るよう）にきなこをかけて恵比須さまに供えた。

学校も田植え休みに入り一家総出で行うが、短期間の仕事で人手が足らず、親戚や近所の者同士が「よい」を組んでお互いに助けあう。手伝いに来てもらうのを「よいがり」、返すのを「よいなし」といった。

昭和三十年（一九五五）のさつきは「夜苗とり」といつて前の晩に暗闇のなか、手探りでとつた。苗は、「束ごと」「なまばら」でもるけ、水を切り立てておく。それを「肥背負かご」に入れて田んぼまで運ぶ。

「たなほかしら」は、田んぼの準備をし、苗の量や田植えの進み具合を見ながら采配を振るう。田んぼは植える前に水を払い、「えんぶり」をかけて平らにするが、あまり早く水を払うと乾いてしまう。

田植えは一枚の田んぼに数人はいり、並んで後ろ向きに四列ずつ植える。曲がらないで進むようにしてを付ける。それには繩を張つたり、「ワク」を転がしたり、また「わりはか」といつて最初に一人が田んぼのまん中を植えていき、あとの人がそれに沿つて植える方法などがあつ

ワク転がし（市野々・昭和41年）



苗とり（市野々・昭和30年代）

た。当時の田んぼは基盤整備がされてしまはず、形も悪く小さいので能率が悪かった。

田植え時期になると、ぬか蚊が出てまとわりつき苦しめられた。その対策としてボロ布を縄状に編んで火をつけ腰に下げたり、山際の田んぼでは畔に若葉を燃し煙で追い払つた。

最初の日には「このはまま」（ホウノキで包んだきなこご飯）を食べる。昼食は「とおり」に板を敷き手伝いの人も一緒に大勢で食べた。

【さなぶり】（行事）

「さなぶり」は「さつき」が無事終わったお祝いと、神に豊作を願う行事で、全農家がさつきを終えたあと、集落一齊のふれ休みとなる。苗二束と「たわら」を神さまに供え、家族全員にも一俵ずつ配る。「このまま」を作つて近所にも配つた。

【牛馬のまつり】（行事）

「牛馬のまつり」は、大切な牛馬に感謝し、病気や事故などに遭わないよう観音さまにお参りする行事で、六月二十日に行われた。

【夏場の牛の飼え】

大切な畜産である牛の飼えには、丁寧に触れてみると、冬は藁が主で夏場になると草を与える。さつきのころになると辺り一面に草が生えてくる



さつき（市野々・昭和30年代）



さつき（市野々・昭和41年）



さつき（下叶水・平成4年）

ので、徐々に替えていく。草はよく食べるが一拳に替えるとお腹をこわすので気をつけた。

草刈りは朝仕事で蓑（みの）を着て草刈り鎌を持ち田んぼの畦や道端から刈り取り、背負って廐へと運んだ。朝露がいっぱいの草を牛はおいしそうに食べた。

田んぼの畦草は、伸びるとすぐ刈つたがそれだけでは不足で、山の草刈り場からスキやワラビのほたれ米ぬかを混せて与えた。

スキやクズの葉は、「切り草」

といつて「押し切り」や「牛のもの切り」で小さく切り「飼えば舟」に入れ米ぬかを混せて与えた。

このように草の与え方は、刈つた草をそのまま廐の前の「馬栓棒」の

下に置くものと、小さく切つて「飼えば舟」で与える方法があった。

牛の世話のもう一つは「肥だし」

で、廐の後ろに三尺の落とし板で仕切られた入り口があり、そこから出した。肥塚は家の外で廐の後ろにあるが、三本鉄でしつかり押さえそ

まで引張り、崩れないようにきちんと積んだ。牛は時々外出して日光浴やブラシを掛けてやつた。

【田んぼの水み（水管理）】

さつきが終わると一段落するが、

翌日から水みが始まる。植えがけは苗が早く活着するように水温を上げてやるなど、水の管理が秋の収穫に大きく影響する。

朝一番に田んぼを見て回り足りないところに水をかけてやる。しかし、市野々、下叶水とも用水条件は非常に悪く、横川の上流に堰を作り長い用水路で水を引いてくるが、周りの山から流れてくる沢水を使うしかなく常に不足した。そのため日照りが続いたり、水路が傷んで漏れるとたらいへんであつた。

両集落とも用水堀の管理には十分気を遣つた。各堀には「堀頭（ほりがしら）」がいて、傷んだ個所の補修やゴミあげ、草刈りなどの指示をした。

市野々は飲料水と農業用水を桜峠付近から流れる「於米沢」から取水したため絶対量が不足し、「番水」といって水争いが起きないよう時間を決めて、それぞれの田んぼに流したり、大字総会で時間割りを決定したこともあつた。

昭和三十年代になると、集落の中央を流れる横川から揚水機を使って水を揚げ、水量も十分足りるようになつた。

まだ雑草も小さいので草を取るのは簡単だが、一日中泥の中に入り腰をかがめての作業はたいへんであり、特に腰がくたびれた。



田の草とり(下叶水・昭和45年)

【田の草取り】

「さつき」が終わると、しばらくは朝晩の水みと、朝仕事の畦草刈り時に稻の生育を見守る。この頃の稻は気温や日照など天候が大きく影響する。育つと田んぼの緑色がだんだんと濃くなってくる。

稻が育つにつれて雑草も目立つてくる。「さつき」から一週間位経つと最初の草取り「いちばんくさ」が始まる。一人五条を受け持ち手でかき回しながら前へ進む。指の間に残った草を丸め足で踏んづけ土中に埋めてやる。「いちばんくさ」は、

夏を迎えると、分蘖も進み茎数も増えガッシリとして背たけも一尺くらいになる。雑草も「いちばんくさ」で取り残したものや新たに生えたものが目立つてくる。こんどは「にばんくさ」である。同じ方法で一人四条を受け持ち取っていくのであるが、草も頑丈になり抜くのもたいへんではからない。炎天下の作業で稻の葉先が顔にチクチク刺さり腰は痛いしアブはまとわりつくし、根気のいる仕事であった。あまり暑い日は日中の時間を外し、朝夕の比較的涼しいときに行い、夕方は暗くなるまで働いた。

「にばんくさ」は特にヒ工を取り、稻の茎の周りに取り残しの草がないよう気をつけた。ふつうは「にばんくさ」で終わるが、雑草の多い田んぼは「さんばんくさ」まで取つた。

【虫送り】(行事)

稻や野菜の葉や実を食い荒らす害虫も脅威であった。防除する術も

ない時代には神に祈るしかなかった。「虫送り」は、夜やなぎの枝に「虫送り」の札をつけ、提灯を持つて集落の上からホラ貝を吹きながら、全戸が加わり「虫送るわ」と唱え、村はずれまで送り害虫が入り込まないよう願う行事。

●七月 【にばんくさ】

夏を迎えると、分蘖も進み茎数も増えガッシリとして背たけも一尺くらいになる。雑草も「いちばんくさ」で取り残したものや新たに生えたものが目立つてくる。こんどは「にばんくさ」である。同じ方法で一人四条を受け持ち取っていくのであるが、草も頑丈になり抜くのもたいへんではからない。炎天下の作業で稻の葉先が顔にチクチク刺さり腰は痛いしアブはまとわりつくし、根気のいる仕事であった。あまり暑い日は日中の時間を外し、朝夕の比較的涼しいときに行い、夕方は暗くなるまで働いた。

●八月 【干し草刈り】

半年にもおよぶ冬の間、飼つている牛の役割は堆肥づくりである。堆肥は厩にぶつこんだ草や糞と糞や尿がまじり酸酵したものであるが、それら厩の敷き用と飼えれば夏の間に

「虫送り」は、夜やなぎの枝に「虫送り」の札をつけ、提灯を持つて集落の上からホラ貝を吹きながら、全戸が加わり「虫送るわ」と唱え、村はずれまで送り害虫が入り込まないよう願う行事。

蓄えておかなければならぬ。「干し草刈り」は、冬場の飼えようと厩へのぶつ込み用として、集落総出で共同の草刈り場から草を刈り、天日で乾燥させ家まで運ぶ作業のことである。だれもが乾燥草を必要としていたので共同の草刈り場の利用には厳しい決まりがあり「口開



農作業の合間(下叶水・昭和40年)



牛の放牧(大平牧場・昭和30年代)

け」の日まで、誰も入ることができなかつた。昭和三十年の例をみると、

田んぼが黄金色になると、刈った稲を掛けて乾燥させる「はせ吊り」に取りかかる。

七月三十日の大字臨時総会において、八月五日とし、午前五時棒頭において「ホラ貝」をふくこと、一戸四名までとし、それ以上出ないこと』と決議されている。

「口開け」は、朝合図によつて一斉に刈り始め、少しでも多くの草を刈るために休まず働いた。一日かかつて刈つた草はそのままにしておき、乾燥させる。三～四日経つと取り入れに行き、真夏の暑い日さしでチョリチョリに乾燥した草を鎌で集め「つながい」であるけ、「やせうま」を使って四束背負い家まで運ぶ。市野々の草刈り場は桜峠の大平であつたが一日六回位往復し、二日間かかつた。

運んできた干し草は、二階や「ちし」にあげて冬まで大事に保存した。夏の盛りに乾燥した草を扱うのは重労働であり、とにかく暑かつた。これが終わるとまもなくお盆の行事が始まる。

●九月

「お盆が過ぎると秋風が吹く」といわれ、ススキも穂を出し朝晩めつ



稻刈り（昭和38年）

●十月

【稻刈り】

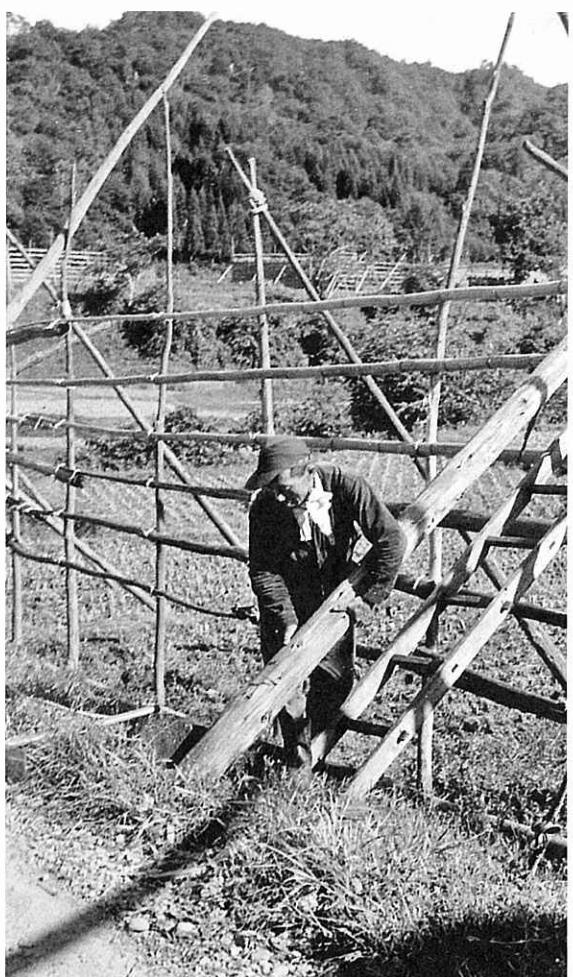
農民にとつて一番嬉しいのは収穫

はせ杭を結ぶ繩は、「岩すげ」の繩を使つた。藁に比べると柔らかく扱い易い。

小屋の軒下や、大木に立てかけておいたはせ道具を点検し、足りない分は自分の山の杉材を切つたり買つて補充した。はせ道具は腐らないよう保管には気をつけ、何十年も持たせた。

はせを吊るのは「いなば」や道路のそばであるが、何組も吊るので多くの場所が必要であった。周りの

草を刈つて片付けると、いよいよ組んでいく。最初は五尺五寸ぐらゐの間隔をとつて縦杭を立てていき、次にはせ木を横に組んでいく。その間隔は一尺ぐらい、腕を使って測つた。高さは七～八段であつたが、はせ木に竹材を使うようになると十段になつた。倒れないように支える杭を「わきぐい」といつて両面から斜めに数本で突つ張つた。秋は台風の季節であり、倒れないよう頑丈に吊つた。



はせ吊り（市野々・昭和47年）



バイnderの稻刈り(下叶水・昭和54年)

人一日八十束くらい刈つた。
その稲をはせ場まで運ぶ。男は八
束、女は六束ずつを背負つた。今度
は、はせ掛けである。二人組みにな
り一人はつだし、もう一人は掛ける。
段の下のほうは簡単だが上になると

ある。稻刈りは「さつき」と同じ
くらい忙しく、子どもたちも手伝い
家族総出の仕事である。天気のいい
日、稻刈り鎌を使って一株ずつてい
ねいに刈り、五~六株になると一把
として丸ける。一枚を刈り終えると
畦や乾いたところに並べて立て、六
把を一束として取れ高を数える。こ
のことを「みずあげ」といった。

【刈りあげ】(行事)
「刈りあげ」は無事に刈り切った
ことを神に感謝する行事であり、穂
れたての新米で「かりあげ餅」を搗
いて神さまに供えた。

【稻こき】(行事)
「稻こき」は、小屋に運んだ稻を



はせ掛け(下叶水・昭和55年)

天候にもよるが、はせに掛けた稲
は約一週間で乾燥した。昔は水分検
定器などなかったので乾燥の具合は
手で触った感じや糲を噛んで判断し
た。

乾燥すると「いねいれ」で、はせ
に登つてどんどん降ろす。下では
「つながい」で丸ける。乾燥して軽
くなり十~十二束を背負つて小屋ま
で運んだ。

はせの一番上は「かさ」といつて
雨がかかり乾きにくく、さらに何日
か掛けた。運んだ後は、はせの周り
で落ち穂拾いを行う。空いたはせに
は、翌日刈った稲を掛け効率よく回
転させた。

【刈りあげ】(行事)
「稻こき」は無事に刈り切った
ことを神に感謝する行事であり、穂
れたての新米で「かりあげ餅」を搗
いて神さまに供えた。

【稻こき】(行事)
「稻こき」は稻をつだす人、こく人、
藁を丸ける人、それを積む人など多
くの人手が必要とした。小学校も三
~四年になると手伝つた。「夜わり」
をすると、夜食にサツマイモふかし
や栗ゆで、かぼちゃ煮などが出た。



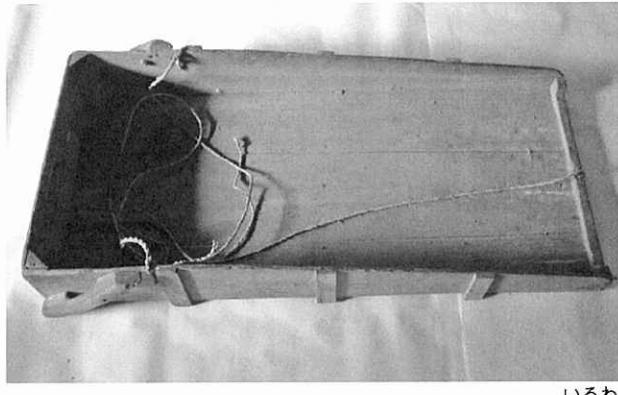
稻運び(下叶水・昭和40年代)



ハセの風景（市野々・昭和53年）



稻こき機械



トレイ

【にわはき】（行事）

米を供出し、たてあげを納め、あと飯米の整理が終わると、米に関する仕事がすべて終了する。その後は藁や穀殻などを片付け、道具類や小屋の中を掃除する。この日は「にわはき」という行事で、「にわはきぼたもち」を作りみんなで食べた。

●十一月

【こと納め】（行事）

十二月八日の行事。今年一年の仕事納め、草餅を捣いて神さま仏さまに供えた。今日で農作業のすべてが終了する。あとは正月の準備に取りかかる。

【糲とおし】

「稻こき機械」で脱穀した糲は、藁の屑も付いているので、それを選

(え)り分ける作業を「糲とおし」

といつた。直径二尺くらいの竹で作った網状のザルを持つてそこを通す。残った穂についた糲はムシロにひろげ「もみよし」で叩いてさらに脱穀する。

糲は小屋の「えり」にある「ます」（落とし板で仕切られた糲入れ）に保管する。供出や「たてあげ」として出す米や、来年の春まで食べる飯米は玄米にし、残った糲はそのまま貯蔵する。

【するしひき】 —糲摺り—

糲を玄米にする作業で、昭和十年代までは「どじるし」（土でできた大型の石臼）を使った。直径二尺くらいの白に上から糲を入れ、天井に

「どじるし」でひいた糲は糲殻と玄米が混在しているので、それを「とみ」にかけて玄米を取り分ける。さらに「まんごく」を通してアラを取り去り、これで玄米ができる。さらに「まんごく」で残った糲は「いるわ」を使って分別した。最後に残った「しな」は煮て牛に食べさせた。「くず米」は石臼でひき、粉にしてだんごや草餅に入れた。

支えられた取っ手を回す。昭和十七年米の供出が始まる頃になると、動力糲摺り機が導入され、そこへ頼むようになつた。

「どじるし」でひいた糲は糲殻と玄米が混在しているので、それを「とみ」にかけて玄米を取り分ける。さらに「まんごく」を通してアラを取り去り、これで玄米ができる。さらに「まんごく」で残った糲は「いるわ」を使って分別した。最後に残った「しな」は煮て牛に食べさせた。「くず米」は石臼でひき、粉にしてだんごや草餅に入れた。

現在は糲摺り機を使って一工程で仕上がるが、むかしは人力で何日もかかっていた。

【お田の神さま】（行事）

二月十六日、山の神が田の神に替わり、それ以来田んぼを見守つてくれた「お田の神さま」が今年の役目を終え、この日からまた山の神に戻る。田の神さまに感謝する行事で、大きなだんごを十六個作り、ザルに入れて供えた。十月十六日に行われた。

●十二月

十二月八日の行事。今年一年の仕事納め、草餅を捣いて神さま仏さまに供えた。今日で農作業のすべてが終了する。あとは正月の準備に取りかかる。

二 市野々向原の開田

村の北はずれ、樽頭、向原、原外に広がる原野は、面積が約六町歩と広い平坦地であったが、水の便が悪く一部畠として耕作していたもの、大部分は手つかずの原野で小雜木が繁り炭倉庫や火葬場などがある。

明治の初期、なんとか水を引いて田圃にしようと、用水路工事の計画を立てた。市野々は中心部を大きな横川が流れているが、水面が土地より低く水を揚げる技術などなかつた。

当時は、いくら遠くても自然落差を利用して水を引くしかなかった。横川約四キロ上流の新股から水を引く計画を立て測量を行い、下叶水と向原の両側から工事を始めた。

遠距離でしかも急勾配のところ

をへつて水路を造るのはたいへん困難な仕事であった。水路の形を何とか造り一度は水を流したが、冬場



向原開田の全景（昭和32年）



ブルドーザー2台を使っての工事

の雪崩によつて壊れてしまい諦めた。今でもその水路跡が残っている。

昭和三十年代になると、ポンプの技術も進化し低価格になつてきたので再度、開田の計画を立て困難を乗り切つて完成した。

当時開田工事事業の代表者として

尽力した高井朋次氏より、この難工事の様子を回想した次のような一文を寄せていただいた。

総会で決定された内容は以下のものであつた。



清水付近の工事

らの悲願であり、是非とも完成してほしい」と励ましてくれた。集落の区長であった加藤利一氏の力強い後押しもあつて集落内でも賛成の声が高まつて來た。

早速地権者の総会を開いた。当日は村長を始め、県の地方事務所耕地課と津川村農林係が出席し対応してくれた。



主水路工事

「昭和三十二年（一九五七）の初夏、当時の津川村長、加藤芳一氏に呼ばれ役場に行くと、西置賜地方事務所耕地課の職員が同席していた。村長から『市野々で生産される米だけでは飯米が足りない。その対策として、向原地区の原野を開田する方法を検討したが、揚水機を使えば可能である。是非実現したいので、集落関係者の同意を取り付けてほしい』といわれた。突然のことなので即答に窮したが、集落としても意義深いことなので努力することを約束した。

早速、長老である太七の林之助翁に相談したら協力を約束してくれた。當時開田工事事業の代表者として

還すること。

工事の実施が決定し、組合が設立された。また、村長の配慮があり役場職員で地権者の高橋一郎氏、高橋安男氏、高橋郁造氏が事務的な仕事や関係機関との折衝などを引き受けてくれたことになった。



水祖神碑建立お祓い(昭和33年)



竣工後、水祖神碑を建立(昭和33年)

測量の結果、開田面積が六町三反歩になることが知らされ、我々は予想以上の面積の広さに驚き、来年の秋には黄色に稔る稲穂を頭に浮べ喜んだ。『飯米の確保どころではない、米が売れるぞ……』当時の我々にとっては夢のような話であった。

しかし、現実はそう簡単には行かなかつた。

七月末に地方事務所で入札を行ない、上山市の堀川土建工業(株)が三百五十万円で落札した。工事の請負契約は次のような内容であった。

一、工期は昭和三十三年四月末日とする。

二、工事代金の支払いについては、

第一回中間払い百万円を十月末日、

第二回中間払い百万円を十二月末日、

第三回工事引渡時に残金を払う。

お盆が過ぎると工事が始まった。

初めて見るブルドーザーの威力と響音に驚きながら、集落の人びとも雇われて働いた。後半は二台となり、工事は順調に進んでいった。

十月末は第一回目の中間払いであるが、目前になつて突然金融機関の手違いにより、貸付ができるなどの通知を受け愕然とした。業者に支払いの延期をお願いしたが、聞き入れてももらえなかつた。現金収入も少な

くたいへんな時代であったが、組合員に説明し協力してもらい何とか期

限内に支払うことができた。

図面上の配分作業も始まつたが、旧所有地を原則的に配分する基本方針が確認されていたので順調に完了した。

翌昭和三十三年(一九五八)春、契約通り田地及び附帯工事一式の引渡しを受けたが、その時我々は田圃を見て愕然となつた。以前に畑の部分は表土もあつたが、原野のところは冬の雪解水で表面が洗われ土が流れ、石と砂利だけが表面に露出していたのである。そういう場所は大なり小なりどこの家にもあつた。当時の開田工事では表土扱いがなかつたのでしかたのないことであつた。

各家では家族総出で石を拾い、いいよ田植えが始まつたが、新田の植え付けはたいへんであつた。少しでも多く作付けをしようと七月月中旬までかかつた家もあつた。それでも初年度の作付け面積は、七割位だつたと記憶している。

この度、横川ダムの建設によつて水没することとなり、昭和三十三年に開田されてから平成三年までの三十年間の幕を閉じる。日まぐるしく変化する農業状勢の中で市野々の農家の大きな支えとなり、経済的役割を充分に果してきたことは自他共に認めるところであろう。

開田よ、ありがとう。そして、さようなら。

元向原地区開田組合長 高井朋次
平成十三年一月記

フィゴを立てタガネを打ち石を刻んで寄贈して下さつたものである。落成式は盛大に開催され、集落の嫁さん達は自慢の唄や手踊りと大賑わいだった。

夏を迎えて一面緑色の田圃を見て今までの苦労も忘れ、喜びで一杯であった。当時の私の日記に次のように記してある。「苦労は筆舌に絶するに余りあるも、めでたく六町三反の美田を完成して永年の夢ここに実現せり。村人は水祖神を建立し喜びを表現せり……」と。その後、手入れの甲斐もあつて年々収穫量を増し、五、六年で熟田と匹敵するまでとなつり、我々の思いは現実のものになつた。

開田工事が竣工すると、未永い水の恵みと安全を祈願して、水祖神を揚水機の傍に建立し祀つた。その石碑は地権者の伊藤嘉累氏が自分で



開田の春（昭和52年）

三 備荒と郷倉

市野々の「寺ノ前」、飛泉寺の境内にそびえる大銀杏の下に「糲倉」（糲堂ともいつた）と呼ばれる建物があった。天保十四年（一八四五）凶作時のため、米沢藩主の御布令によつて建設されたもので、市野々・下叶水・桜の農民が利用した。

この地方は、冬が長く米单作で反収も少ない。一旦凶作に見舞われると、悲惨な状態であった。「糲倉」は隣保共助のたてまえから飢饉に備えるため米・粟・稗などを貯穀する備荒貯蓄制度で、生活するうえで重要な制度であつた。

◆藩政時代

幕藩時代は各藩とも自給自足の經濟体制をとり、他藩との交流も、物資の融通もすこぶる困難であった。

しかも農業技術は極めて幼稚でその豊凶は全く自然の力によって左右された。いつたん凶作になると米穀を得る方法はなく、そのうえ、東北地方は天惠に乏しく、しばしば冷害や干害、水害などに見舞われた。

米沢藩が備荒貯蓄の計画を立てに至った直接の動機は、宝暦五年

年（一七五五）の大凶荒、同七年（一七五七）の大洪水であった。当

時、財政の窮乏に苦しみ凶荒に対する備えがなかつたため、その惨状はたいへんなものであった。そこで藩主上杉治憲は率先して貯蓄の範を示し、安永三年（一七七四）北寺町に間口三間、奥行き二十間の倉庫五棟を建て、糲三万俵を備えた。

藩士には禄高百石について半俵の割合で糲を備えさせ、また、商民には年々出金させ、その一部で糲を買って貯蔵させた。安永六年

(一七七七)には貯蔵糲が六百俵になつたので、新たに倉庫二棟を川井小路裏に建てた。これを「義倉」といった。

さらに、農民に対する老若を問わず男女一人につき糲一升ずつを出させた。これを「郷倉」または「お備倉」と呼んだ。

◆維新後の状況

藩政時代に広く普及した郷倉も、明治四年(一八七一)の廢藩を契機にしだいに衰退の一途を辿った。

維新後は封建制度が崩壊し、交通機関の発達によって物資輸送が便利に、そして自由になるにしたがい、幕藩時代の自給自足の経済体制も崩れ、地方ごとの凶荒対策として貯蓄をする意義を失つたことも郷倉衰微の一つの原因であった。

◆市野々・下叶水の 糲倉(糲堂)

市野々は江戸時代から明治初期まで、越後街道の宿駅として、米沢・小国・越後を結ぶ交通運輸に重要な役割を果たし、宿屋、牛馬宿、背負子宿、問屋などで繁盛した。

しかし、元和元年(一六一五)頃のものとされる『邑鑑』(今の福島

県の伊達・信夫地方と今の山形県置賜の上長井・下長井地方の村々の基礎データを記した村勢記録)によると、当時の市野々村は石高百十二石九斗六升で年貢の税率が三十八パーセント、戸数二十一(役屋四・肝煎(きもいり)一・間脇(まわご)十六)、人口八十九人(うち十五歳から六十歳までの男子は十五人)、一方、叶水は石高百九十七石九斗で年貢の税率が三十パーセント、戸数二十八(間脇二十四)、人口百三人(うち十五歳から六十歳までの男子は二十五人)だった。「役屋」は一人前の賦役を課せられた農民、「間脇」は役屋の田畠を請け負つて耕作したり労役する従属農民だったから、税の重さもあわせて村人の辛さが想像できる。

市野々に建てられた糲倉は、備荒・共助を目的として使用していくもので、市野々の平均石高五石三斗、叶水が七石と非常に少ないこの地域では、一度凶荒に見舞われると生活が困窮したことは明らかで、糲倉の果たす役割は大きかつたと考えられる。

また、年貢米の上納にあたって、直接藩庫または郡奉行の管轄下のものとされる

現在小入共々 メ百三十七俵三斗九升

ともあつた。市野々の糲倉がその役割を果たしたかどうかは定かでないが、外中津川の米御蔵は叶水の山崎にあって糲倉掛役を務めた伊藤氏を「おくらもり」と呼んでいた。

蔵は三間の四間(元は三間の六間)で厚い壁に囲められ、中は仕切つて使用した。旧津川村(外中津川)区域の年貢米を収納し、米は小国(御蔵)に輸送し糲はここに貯蔵した。そしてこの年貢収納のため、掛役が小国より出張し四十日も伊藤氏宅にて一部を大字総会の決議録より書き出してみる。

▼明治四十四年(一九一二)二月一日協定

共有糲貸付は一回五俵とす、貸付利子は一俵に付、三升とする

▼大正五年(一九一五)一月九日

糲倉修繕の件、暴風のため屋根破損につき、修繕すること

▼昭和二年(一九二七)三月十二日

糲倉修繕の件、暴風のため屋根破損につき、修繕すること

▼昭和十年(一九二二)三月四日

備糲倉修繕をなすこと、ブリキ缶にて之を為すこと、一戸一ヶ差し出すこと

▼大正十三年(一九二四)一月四日

共有備糲の貸付利糲並びに備荒

糲は代金に換算し貯金に預け入れるものとす、糲の価格一件に付、金九錢五厘、正糲は右価格の標準により、現金納付差し支えなし

▼昭和二年(一九二七)三月十二日

糲倉修繕の件、暴風のため屋根破損につき、修繕すること

◆恩賜郷倉

昭和九年(一九三四)は日本各地に自然災害が起こり、中でも冷害に見舞われた東北地方の被害は甚大

で、明治三十八年(一九〇五)以来の大凶作となり、多くの農山村が飢餓に苦しんだ。政府は政府所有米の臨時交付として五十万石を、東北六

県の町村に交付した。また、皇室から五十万円の御内金が下賜され、これらをもとに凶作などの自然災害

に対応し飯米恒久対策として、郷倉(備荒米貯蔵)の設置が計画され建

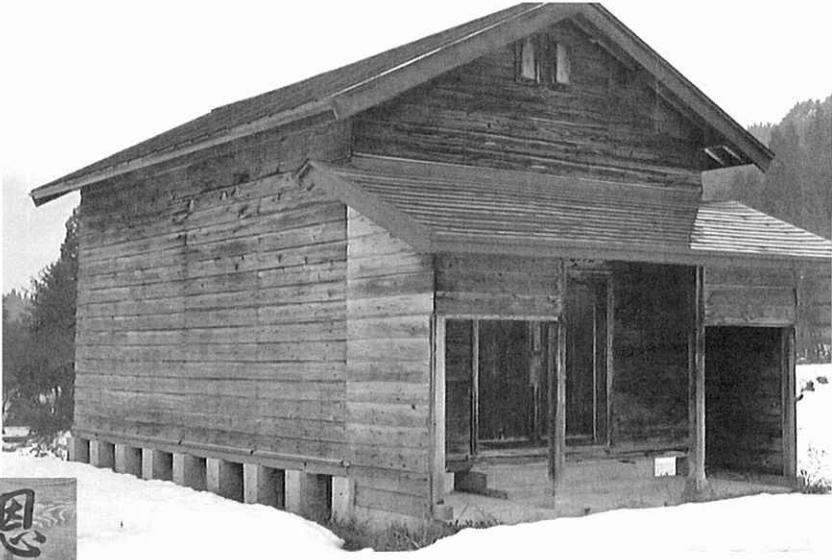
設希望市町村に配分された。これを

「恩賜郷倉」といった。

市野々・下叶水の 恩賜郷倉



復元された大滝地区の恩賜郷倉



昭和九年（一九三四）の大冷害では、この地方も大きな被害を被り、救済措置が施された。

救農土木事業として桜峠道路の改

修工事が行われた。また、旧津川村

に政府米千二百八十一俵が無償交付

され、うち市野々下叶水郷倉組合に

は百八十四俵が五ヶ年賦無利子にて貸し付けられた。その米は各戸に二俵ずつ配給になり、当時やつと開通になつた米坂線の沼沢駅まで、各人が取りに行き背負つて運んだ。

さらに、「郷倉は農業の本質に照らし且つ冷害の惧れあるに於いては農家経済の安固を図る上に極めて重要なは論を俟たず故に之れを永遠に維持し備荒の目的を全うする方途

は市野々及び下叶水に住所を有する農業者で、毎年十二月まで一世帯五升を積み立てる義務を負い、米の代わりに稗・粟・蕎麦または金員でもよいとされた。

「市野々下叶水郷倉組合規約」が制定された。本規約によると、組合員は市野々及び下叶水に住所を有する農業者で、毎年十二月まで一世帯五升を積み立てる義務を負い、米の代わりに稗・粟・蕎麦または金員で

中戦争が勃発すると、政府は戦時体制を固め、とくに主要食糧である米の安定確保を農業政策の重点に据え

て食糧の管理増産を図った。

昭和十七年（一九四二）には米の供出が始まり、いよいよ戦争が激しくなると食糧事情の悪化により、備蓄どころではなくなり、備荒貯穀制度は消滅した。

戦後は政府米売り渡し時の検査や一時保管庫として使用され、昭和三十一年（一九五六）一月旧津川村から市野々へ五万円で払い下げ、昭和三十二年（一九五七）には米倉庫として農協へ貸すこととなつた。

一方、備荒田は「市野々下叶水郷倉組合員世帯の三分の二以上が三ヶ月間耐えうる飯米数量を貯蔵することとし、超えた分は組合員に貸し付けるかまたは処分することことができた。組合員は市野々が二十五人、下叶水が十九人のスタッフであった。

市野々・下叶水の 恩賜郷倉

を講するは壱に聖旨に副い奉るのみならず農村更正の実を挙くる所以たるへし……」の趣旨により、建設資金として皇室より御下賜金八十円、国費金三百四円合計三百八十四円の交付を受け、昭和十年（一九三五）「恩賜郷倉」が建設された。

建てられたのは市野々寺ノ前で、前の糀倉より約三百メートル西寄りの場所であった。

郷倉建設とあわせ農家救済として、耕種の改良試験研究による冷害防止と貯穀を容易にするため「報恩備荒田」の設置が勧奨された。

昭和十二年（一九三七）七月、日中戦争が勃発すると、政府は戦時体制を固め、とくに主要食糧である米の安定確保を農業政策の重点に据え

て食糧の管理増産を図った。

昭和十七年（一九四二）には米の供出が始まると、いよいよ戦争が激しくなると食糧事情の悪化により、備蓄どころではなくなり、備荒貯穀制度は消滅した。

戦後は政府米売り渡し時の検査や一時保管庫として使用され、昭和三十一年（一九五六）一月旧津川村から市野々へ五万円で払い下げ、昭和三十二年（一九五七）には米倉庫として農協へ貸すこととなつた。

四 養蚕業

横川上流の東滝集落に「蚕養神社

(祭神は稻田比咩命)」といふ蚕の神さまが祀られていた。毎年四月には盛大にお祭りを行い、蚕が腐つたり、ネズミに食われることなく立派な繭ができるようみんなで祈つた。

蚕を祀る神さまは小国郷ではこ

だけで、市野々や下叶水からも、蚕を飼う家ではお参りに行つた。また、滝集落の入り口に「見蛇(けんじや)」というところがあり、その原っぱで風呂敷を広げ蛇を追い込む仕草をし、逃げないよう包んだものを持ち帰り、蚕を飼う部屋でひろげて蛇を放し、ネズミが部屋に入り込まないようお呪いをした。やがて「蚕おき」が終わると、部屋に放した蛇を風呂敷に包み「見蛇」に返してきた。ネズミは成長した蚕を食べる大敵で、その時期にはネズミの天敵である蛇を殺すなどといった。

水田面積の少ない地域で山の傾斜地や原野を利用して桑を植え、それを飼料に短期間で現金収入となる「蚕おき」は、米作りとともに日常生活の基盤をなし、昭和三十年代の初めまではほとんどの家で行われた。

◆養蚕業の始まり

米沢地方の養蚕は古く、奈良時代から行われていたようである。そのころはもっぱら自生の山桑にたより、桑を栽培したのは蒲生時代からといわれる。

安永元年(一七七二)八月、治

憲は家中の諸士に命じて桑・漆一本を植えさせた。次いで安永四年(一七七五)九月には樹芸役場を置いて、桑木百万本を領内に植える計画をたてたが、天明の凶荒によりこの計画は頓挫した。しかし、その後も桑は奨励され小国では山ろくの傾斜地を利用して「かの畑」を作り山桑の栽培が行われた。

小国地方は、気候や積雪などの関係から、桑葉の発育が平野部よりも遅く、上簇期が梅雨に当たる七日間遅く、上簇期が梅雨に当たりやすく飼育にはやや困難で、春蚕(はる)はあまり適さなかつた。

蚕(はる)はあまり適さなかつた。それに比べると稚蚕の飼育など保温の設備を要しない夏秋蚕は労力配分や桑葉の発育などから適していた。桑葉からみても繊度細く蚕の成育も良好であった。

◆養蚕業の発展

生産された生糸は国内向け、輸出向けと区別して冥加金が課された。

明治六年(一八七三)一月生糸取締規則等が布告されて、生糸の売買は許可を得た鑑札を持つ者でなければ取り扱うことができなくなつた。

明治十年(一八七七)この規則は廃止され「今後製造の生糸はその結

紙に、繭・真綿・出壳・山繭などは、その上包に県・国所姓名を記し該製造人の印を押すべし」と改められた。

当時の生糸仲買人は第六大区(現小国町区域)には三十八人おり、市野々には高井伊予次と伊藤為助の二名がいた。やがて生糸取引の公正と、粗製防止の意味から生糸市場を開設することとなつた。

五月の下旬から六月に入つて、福寿草が黄色の花からみどりの葉つぱに変わり、木々の葉も茂つてくると「春蚕」が始まる。

◆おかいごさま

かいこ蛾と呼ばれる蛾の幼虫「おかいこ」がさなぎになるときに、自分の体のまわりに口から糸を出して繭を作る。その繭から糸を取り出し

て作るのが生糸(絹糸)。この「おかげ」を卵の状態で購入し、それ孵化し、糸となる桑を与えて、飼育するものが養蚕である。この地方になると「おかいごさま」が住むよ

は、養蚕を「蚕おき」といい、蚕をつかつた。「蚕おき」は、この地でも古くから米作りと並ぶ産業であつたが、そのことは小正月の行事である「団子さし」に団子と一緒に「繭だま」を飾つて豊作を祈つたことがある。

◆蚕おき

「蚕おき」は春一番に飼われるのが春蚕、次が夏蚕、秋蚕、晚秋蚕が多いところでは年に四~五回もおくが、この地方では專業でなく農業の合間にやることもある。ほとんどの家では一~二回、多い家でも三回がせいぜいであった。

五月の下旬から六月に入つて、福寿草が黄色の花からみどりの葉つぱに変わり、木々の葉も茂つてくると「春蚕」が始まる。

卵が来る前にやつておかなければならぬのは、蚕部屋を作り、道具類とともに消毒することである。この家も専用の蚕室があるわけではなく、「茶の間」や「二ノ間」、「上段」などの座敷や、多く飼う家では屋根うらの「ちし」まで使つた。普段は座敷として人が住んでいるが、時期になると「おかいごさま」が住むよ



蚕に桑を与えているところ（下叶水・昭和30年代）

うになる。

畳をきれいに掃き消毒し、蚕の床

になる「藁だて」を置く棚を組み立てる。棚は組み立て式で「ちし」に保管しておいた杉の細木や竹材を使い、「藁だて」が九段重なるように組んだ。

道具類は、庭にひろげて日光消毒をする。各家の庭にひろげられた蚕の道具を見ると、「ああ、また今年

も蚕おきが始まるな……」と、忙しくなることを感じた。

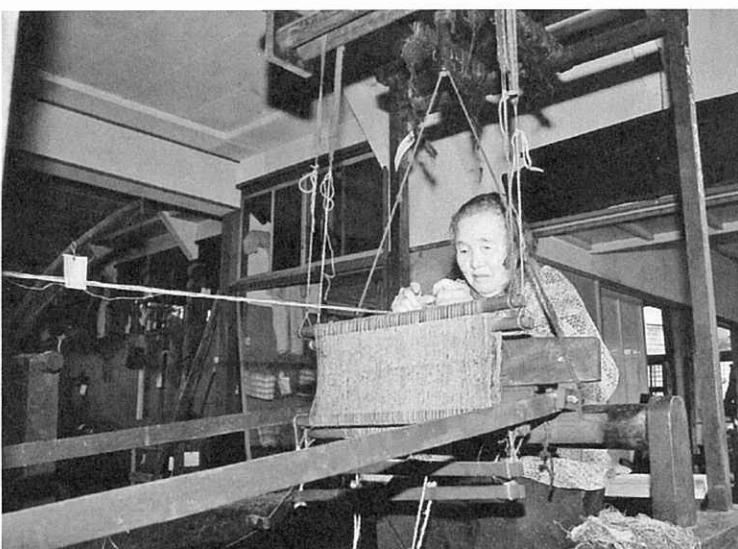
蚕種屋に頼んでおいた、半紙一枚半に黒ゴマのよう付いた卵がくると、保温し孵化させる。それを鷹の羽根などを使つて「藁だて」に掃き下ろす。これを「掃き立て」といつた。これは儀式のようなもので緊張した。

卵からかえった「毛蚕（けご）」の道具を見ると、「ああ、また今年

も蚕おきが始まるな……」と、忙しくなることを感じた。

桑は午前中と午後一回ずつの二回採つてきた。枝から葉だけを指でこいて、最初は藁で編んだ「こでいれ」を腰に下げそこに入れ、一杯になると「桑がます」に押し込み背負つてくる。

昔は学校も「かいご休み」があつて手伝つた。蚕が一番多く食べるとときは家族だけでは間に合わずよそから人手を頼む家もあった。



機織り（昭和54年）

パラ振ると、じきに這い上がり食べ始める。蚕は脱皮を繰り返しながら成長していく。

「蚕おき」は温度管理が大切で、部屋に温度計をさげ昼夜を問わずに注意した。温度をかけすぎて過保護になると弱い蚕になる。上手な人にはあまり温度をかけないで育てるコツがあった。特に「春蚕」は気温が低いので気を遣つた。

最初のうちは桑もそろ多くは食べないが、孵化して二十日も経つと食欲が旺盛で、葉を食べる「さわさわ」という音が聞こえてくる。

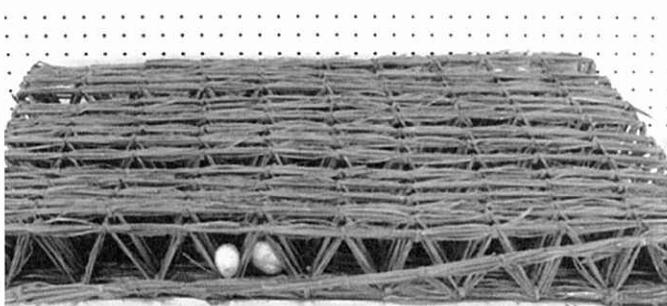
桑の木は、ほとんどが「山かの」に植えた山桑で、自分の土地に植えたり官地を借りたり、畠の周りや原野の空いているところがあればどこにも植えた。

量もぐんと多くなり、桑の葉採りも樂ではなかつた。「入梅の頃は特にきつかつたなあ。雨が降ろうがなんだろうが、おかいござま、生き物だから休みなんてない（笑）。桑の葉採りに行かねばなんねがつた……」と、苦労を思い起こして老人が語つた。採つてきた桑は茶の間の畳を剥がし積んでおき、朝、昼、夕方と三回与えた。雨の日に採つてきて濡れた桑は、蚕は湿氣を最も嫌うので手

でかき回し空気を送つて乾燥させてから与えた。

蚕の糞や食べかすを始末するのを、「あとだて」といい、汚れた「糞だて」を毎日取り替えて、天日に干して乾燥させ、病気が付いたりしないようにと気を遣う。軒先に「糞だて」を何十枚、何百枚とつり下げて干しておく風景は、この時期、どこの家でも見られたものだった。

蚕は「ぬけかえ」といわれる脱皮を繰り返しながら成長する。一齢から三齢まで三回の脱皮を繰り返



まぶし

五齢期、忙しさも本格化する。この時期の十日間で一齢期の百倍の桑を食べるといわれ、「さわさわ」と食べる音が聞こえ食欲の凄まじさを感じさせる。

五齢になつて一週間も食べ続けると、蚕は熟し頭部が黄色く透けて桑に上がり巣をさがすような素振りをする。この状態は「よどみ」といつて蚕が繭を作り始める合図である。

「よどみ」になつた蚕は一匹一匹取り出し、巣作りの道具である「まゆし」に移した。この作業を「まゆかき」といった。蚕は揃つて熟すわけではなく、たくさんいる中から桑を食べなくなり「よどみ」になつた蚕をさがすのは慣れとカンが必要であった。この時期が「蚕おき」の一

す間を稚蚕といい、三～四齢を熟蚕という。脱皮が始まると頭をもたげてじっと空を見つめ、一日を過ごす。それを「眠」に入つたといい、そのまま桑を食べないので、一息つける。四齢のときを「にわよどみ」といって、「からこ」をはたいて、繭のかたちに作り、良い繭になるよう供された。この「からこ」を食べるのも楽しみであった。

四回目の脱皮が終わるといよいよ五齢期、忙しさも本格化する。この時期の十日間で一齢期の百倍の桑を食べるといわれ、「さわさわ」と食べる音が聞こえ食欲の凄まじさを感じさせる。

すべての蚕が繭を作り始め形がだんだん整つてきて、「まぶし」からみ出しても繭を作ろうとする蚕はないかなど最後まで注意が必要である。蚕は繭の中でさなぎになる。繭が完全にでき上がると、「まぶし」からはずす「まゆかき」をして、周



蚕道具

番忙しいときである。

「まぶし」は相当数必要としたの

で冬の間に作つておく。それを「まぶしおり」といった。「まぶし」に

入つた蚕は、繭を作り始める直前に赤い糞をし、最初で最後の尿を出す。

こうして体内の排泄物をすべて出

してから繭を作り始めるのではない

かといわれている。

すべての蚕が繭を作り始め形がだ

んだん整つてきて、「まぶし」か

らはみ出しても繭を作ろうとする蚕は

いないかとか、ネズミに食われてい

ないかなど最後まで注意が必要であ

る。蚕は繭の中でさなぎになる。繭

が完全にでき上がると、「まぶし」

からはずす「まゆかき」をして、周

りのけばを取つてきれいにし、選別

して袋につめ出荷する。

出荷する繭には等級があり、硬さ

や形などで選別された。あまり軟ら

かくても大きすぎてもダメであつた。

出荷できない繭は自家用の真綿を取

るために使われた。また、生糸を取つ

て反物を織つてもらい、染め上げた

着物をもたせて嫁に出すのも、養蚕

農家の冥利だったといふ。「紋付き

でも羽織でも）何か一つ、親の手が

かかったものをもたせてもらつたも

んだ」と、養蚕農家から他家に嫁い

だ女性が語つた。養蚕とともにあつ

たこの美しい習わしは、昭和三十年

頃まで続いていた。

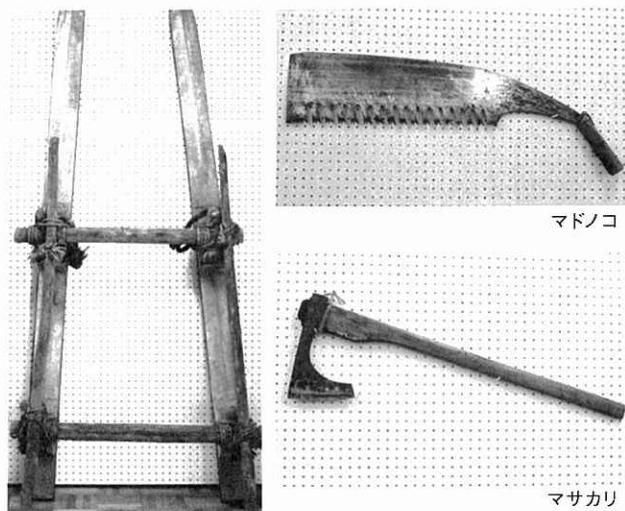
五 木出し



木切り。倒す方向を見誤ると大事故に。誰もができる仕事ではない



柴も片付ける(昭和31年)



ソリ

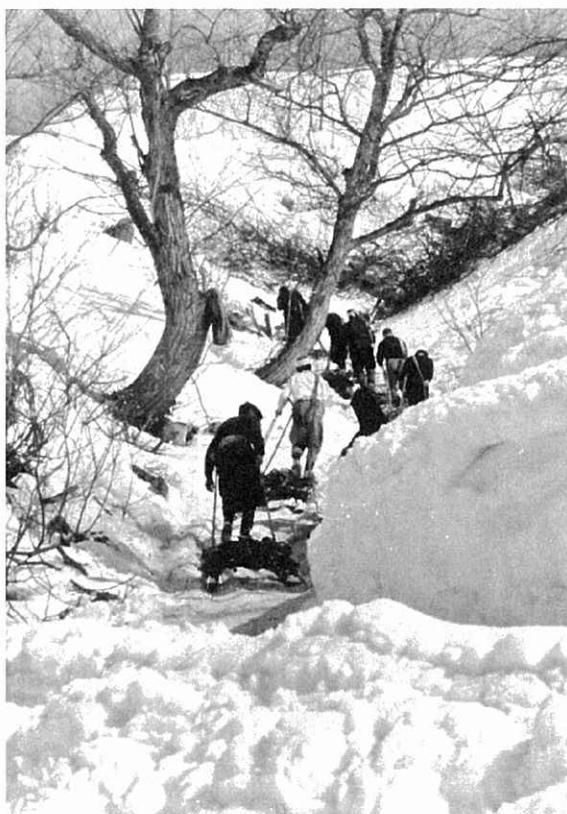
マドノコ

マサカリ

「木出し」は、各家の囲炉裏やかまどで使う一年分の焚き木を集落みんなで協力して、払い下げを受けた国有林に切り出しに行き、奥山から雪の上をソリで滑らせ運搬してくる仕事である。

日常使う焚き木は、それぞれの持ち山から切り出したり、川木を拾い集めたりしたが、燃料をすべて木に頼った時代には、それだけの量では到底足りなかつた。また、山を所有していない家もあつたため、集落や親戚同士が協力し合う共同作業のかたちで昔から行われてきた。

山の「木分け」から始まり、「木切り」、運搬用の「道つくり」、山から木置き場への運搬、さらにそこから各家まで運び、木を割つて屋根裏の「ちし」に積み上げるまで約一ヶ月間。この作業は古くから「木出しに行くか、鉈で頭を削がれるか、



空ソリを引っ張り上げる(昭和39年頃)



木置き場。山からここまで共同で運ぶ（昭和39年頃）



ソリが道からはずれた時は助け合う（昭和39年頃）

どつちが良いか」と警えられるほど重労働で、かつ大急ぎで片付けなければならぬという大仕事だった。

◆切り出す手順

「木出し」は最初、切り出す材木を確保することから始まる。集落には国有林払い下げ絵代がいて、営林署との交渉や世話をした。払い下げを受ける山は前もって数年分決めておき、場所や生育状況などを考慮しその年に入る山を選ぶ。時期は春の彼岸過ぎで、降雪がおさまるのを見計らって行われた。

家々では、「ちし」に上げておいた木製のソリを下ろし「よこゆうぎ」と「たちゆうぎ」を結わえて組み立てる。切り出す山が決まるとき、「木分け」をする。全員で山に入り基準になる立ち木を決める。それを「ひとかま」として、すべての木の樹皮に「かまかず」と通し番号を削り付けていく。大きな木になると一本で二かま以上になり、切り分けることもあった。木の質の良し悪しや場所のことなどを考え、一軒分が割った木で平均四／五棚になるように組み合わせた。山から下りると、回り番の宿元に集まつてクジを引き自分の持ち分と

なる立ち木を決める。その後は作業の無事を願つての宴会になる。翌日はそれぞれが山に行つてクジで当たつた木の番号脇に屋号や目印を付けて一人で操作したが、後に「うで木」を付けた大型のソリに木を横に積み、前で運転し後ろに一人付く方法に変わり大量に積むようになった。ソリに積んだ木を縛りつけるロープを「もどち」といい事で、誰もができるものではなかつた。すべての家が切り終わるまで一週間ほどかかった。切り倒した木は、焚き木用に三尺（九十七センチ）に切つて積んでおいた。

◆運搬方法

いよいよ共同で行う運搬作業が始まる。まず集落内の平地に一時保管場所である木置き場を決めると、次は「かんじき」をはいて横に歩きながら山から木置き場まで運搬道をつくる「道付け」である。一戸から男女二人が出ておよそ二日間かけて行った。道付けにはまず路線取りが大事である。緩やかな下り道で最短距離になるよう先頭はペテランが務めた。それが終わると運搬にかかる。ソリ一台に運転手と「しこおし」（ソリの後ろで支える助手）の二人が付いて操作し運び出す。



重労働のなかでひと休み（市野々・昭和31年）

かつて、市野々では木を縦に積み、後ろ乗りで「しくさ」（藤の蔓で編んで作ったブレーキ）を付けて一人で操作したが、後に「うで木」を付けた大型のソリに木を横に積み、前で運転し後ろに一人付く方法に変わり大量に積むようになった。ソリに積んだ木を縛りつけるロープを「もどち」といい二本使う。また、肩にかけソリを引くロープを「かたつな」といつて積んでおいた。



市野々「北田」の木出し（昭和17年）



下叶水の木出し（昭和35年頃）

た。一日の仕事を終えて夕方帰るときには、濡れて凍りついた「かたつな」と「もどち」を持ち帰り「ひだな」に下げる乾かした。

第一段階は山の切り倒した場所から集落内の平地に作った木置き場まで運ぶ。そこまで約一週間かかった。

第二段階は木置き場から各家まで運ぶ。距離は様々だが平坦な場所や登り道ではソリを引くのがたいへんで、遠い家では一周間位かかることもあつた。家まで運んでくると「まさかり」と「かなや」を使って五・十

センチ角に割って積む。乾燥させるため積んだ上には、雨が掛からないよう杉の皮を何枚も並べて載せておく。それを「木によ」といつた。最終的に「ちし」に上げるが、それも大仕事であった。家族だけでは人手が足りず親戚や近所と「よい」をした。盆が過ぎて稻刈り前の晴れた日に、最初は「茶の間」の畠を剥いでそこに庭先の「木によ」から背負つて運ぶ。次に「ちし」に「はしご」を架け手渡しで上げる。「はしご」の中段に一人「中取り」が居て下から渡された木を「ちし」の人へ渡す。上では「中取り」から受け取る人と端から丁寧に積むために二人が居た。「ちし」まで上げると作業は完了する。

木出しは春一番の力仕事で、冬季間はあまり身体を使わないと鉛つており慣れるまでなかなか苦労した。仕事はきついが材木の上に乗つかり、みんなでひろげる弁当や午前と午後の1服の中にあんこの入った「こじはん餅」を食べるのは、楽しいひと時であった。

十五歳になり一人前として扱われるようになった男子が、集落の共同作業へ参加するのもこれが最初で

ある。家族はみんなに挨拶して回り、めんどうをみてほしいとお願いした。集落大半が参加する共同作業で協力合うことで連帯感も増し、お互に絆もふかまり意義のある仕事である。

六 炭焼き

冬には雪が三メートル以上も積もり、収入に結びつく仕事がなくなるので、農作業が終わると「炭焼き」をやって生計を支えた。国有林から払い下げを受けた山に炭窯を造り、持ち分が決められたナラやクヌギ、ブナやイタヤなどを材料に生産に努めた。焼いた炭は窯からそれの家まで背負つて運んできて、量がまとまると伊佐領駅までソリにのせて運び業者に卸した。

炭窯造りも炭焼きも、重労働のため男たちの仕事であった。毎年、原木を求めて山の奥へ奥へと炭焼き窯が造られていった。

炭焼きの仕事は、市野々より下叶水の方がさかんだつたようだが、当時の市野々では通称「与太おんちゃん（おじさん）」と呼ばれていた伊藤与太郎さんが、集落ではただ一人一年を通して「炭焼き」に従事していた。おんちゃんは終戦後、「生まれ



木置き場から各家まで更にソリで運ぶ（市野々・昭和30年代）



山の炭焼き小屋（下叶水・昭和43年）

育つたところでくらしたい」と、それまで住んでいた奥さんの故郷の東京から帰郷して市野々に戻ってきた。しかし、所有する土地も少なく、水田面積がもともと少なかつたこの地で農業だけでは食べていけず、炭焼きを本業にして、七人の子どもを育てあげたと聞く。

あつた。昭和三十年代も半ばになつて石炭や石油・ガスが普及するとともにこの仕事も行われなくなり、焚き木は薪として利用される程度になつた。



山の炭焼き小屋での野沢栄太郎氏（下叶水・昭和45年）



炭焼きに向かう2代目斎藤宇一郎氏（下叶水・昭和30年代）

炭焼きの仕事は、最初の窯を造り上げる一ヶ月間がたいへんであった。石と土と木を組み合わせて造るため、石の少ない山にあたった時の苦労は計り知れない。「石百背負い、土百背負い」といわれるほど、石窯を造るには大量の石と土を必要としたからである。窯には、内径が五尺×六尺の「ごうろく窯」と呼ばれる大きさの窯などがあった。ひと窯で四、五俵の炭が出る大きさに作り、窯ができたら木を切つて運び、窯に入れかつたという。

火をつけじつと待ち、三日目に出し上げた。良い炭づくりは技術も必要だが木切りから運搬、熱い中での窯出しなど、なによりも重労働の連続だった。

焼いている時に炭材が不足してしまったり、思うように炭の貫数が出ないときはがつかりしたものだったと聞く。冬の泊まり窯で炭の搬出をするのもたいへんで、何日も風呂に入れないでの、手足が荒れるのも辛

きたときはそれだけに喜びも増したそうだ。窯出しの時は、良い炭は丸いままで五六六本も出てくる。その時に「ピン」という澄んだ音がするので、「今日は金の音がするぞ」と大声で他人に教えたかったが、だ。（逆に出来が悪いときは「鬼のヘドだ」といつたりしてがつかりしだと、吹雪の時などはみんなと一杯飲むのが楽しみであった。缶詰を肴に飲んで語り合うひとときは最高だった。みんなたまの休みが待ち遠しくて、一生懸命働いたという。

そして帰りがけには必ず「太七」に寄り、炭俵を背負つたまま入り口に腰掛けて、キセルたばこをうますくわえながら、ニコニコして「太



炭焼き小屋から家まで背負って運ぶ



かの作りの与太おんちゃ（市野々・昭和31年）

七」のじいちゃんと話していたそうだ。世間話をしながら、まるで一日の疲れをいやすようにひとときを過ごして、晴れ晴れとした顔をして炭俵をかつぎながら家に帰つていった。戦後間もない頃の市野々は疎開者も多く、現金収入となる仕事も少なく、どの家でも一般的に生活は楽ではなく、かつた。

「与太おんちゃ」も同様に樂ではなかつただろうが、心が荒ぶこともなく、常に温厚で、炭焼きの仕事はもちろん何でも、熱意を注いで真剣に取り組んだ人だつたといふ。

七 その他の仕事

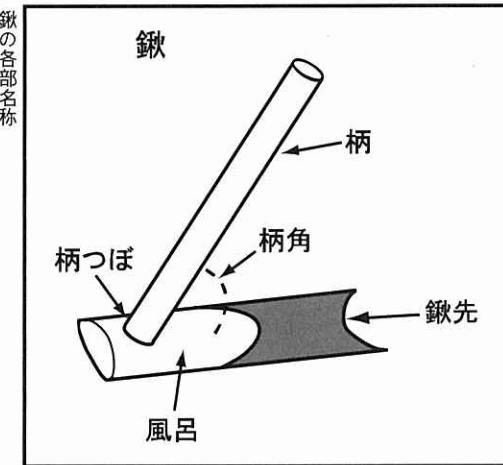
◆ 鍬柄（くわがら）作り

雪に閉ざされた冬仕事の一つとして、鍬柄作りが行われていた。

市野々では太七と向原で昭和の中頃まで作っていた。当時使われていた「鍬型」など、道具がいまも残つてゐる。

鍬は、農具の一つで田畠を耕すほか、中耕・除草・作畦など各種の作業に用いられる。最初の鍬は柄も刃も木製であったが、木の刃では軽いうちに摩滅が激しく土を掘り起こす

入源は近代的農業による増産や会社勤めに変わつていき、冬の間も炭焼きの仕事をやめて都会へ出稼ぎに出る人が大半になつた。しかし与太おんちは最後まで炭焼きをし続けた。エネルギーは次第に灯油やプロパンガスに移り変わり、木炭の利用は減少してその役割を終えた現代。生業としての炭焼きは姿を消してしまつたが、炭焼きの文化は市野々の与太おんちゃの話とともに、今の時代に伝えられている。



鍬の各部名称

には十分ではなかつた。鉄の技術が入つてくると、木の刃の先端に鉄の先鉄を付けるようになつた。これを鍬先といい、U字形をしている。兜の前ひさしの上に角のように二本出でいる金具を鍬形と呼ぶが、それは鍬先からきているといふ。

鉄の鍬先は長く使えるが、木製の部分は朽ちると取り替える。その木製の柄と風呂の部分を鍬柄といい、それを作つて商売にしたのが「鍬柄作り」である。

以下その作り方について記述する。

『材 料』

鍬柄の材料は、ブナである。秋の収穫も終えた10月から11月にかけて、山に入つて原木を切り倒し、その場で荒挽きを行い背に担いで出していく。原木は官地のブナを払い下げてもらうのであるが、営林署員と一緒に山に入り、1本1本当たつて性(しょう)のよいものを探して買う。性の良し悪しは皮を剥いでみると分かる。木目が破線状に途切れていますのはよくない。実線できれいに通つているのが割れ具合もよく仕事がしやすい。

木の良し悪しは、立っている場所によつても違う。「しずれ」(風のため雪が吹き溜まりになつてゐるところ)がかかる場所の木はよくない。原木の太さは60~70センチくらいのものが最もよいが、この



材料のブナ林

位の太さでも100年以上は経つてゐる。1本当たりの値段は、大正初期に1円代で1~3本買えばひと冬の仕事をするのに足りた。

『製作工程』

鍬柄作りは柄ばかりでなく、風呂の部分も含む。風呂のことをここでは「へら」といった。

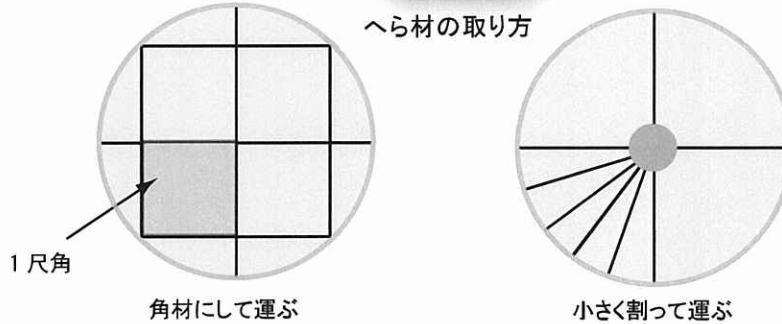
(1) 玉切り

買った原木を切り倒し、へらを取る部分は1尺2寸(36センチ)に、柄を取る部分は3尺8寸(115センチ)に玉切りする。道具は幅の広い横引き鋸を使う。

(2) 運搬

「へら材」は、鋸で挽いて角材にして運ぶ。場合によつては小さく割つて「てんご」に入れて運ぶこともあつた。

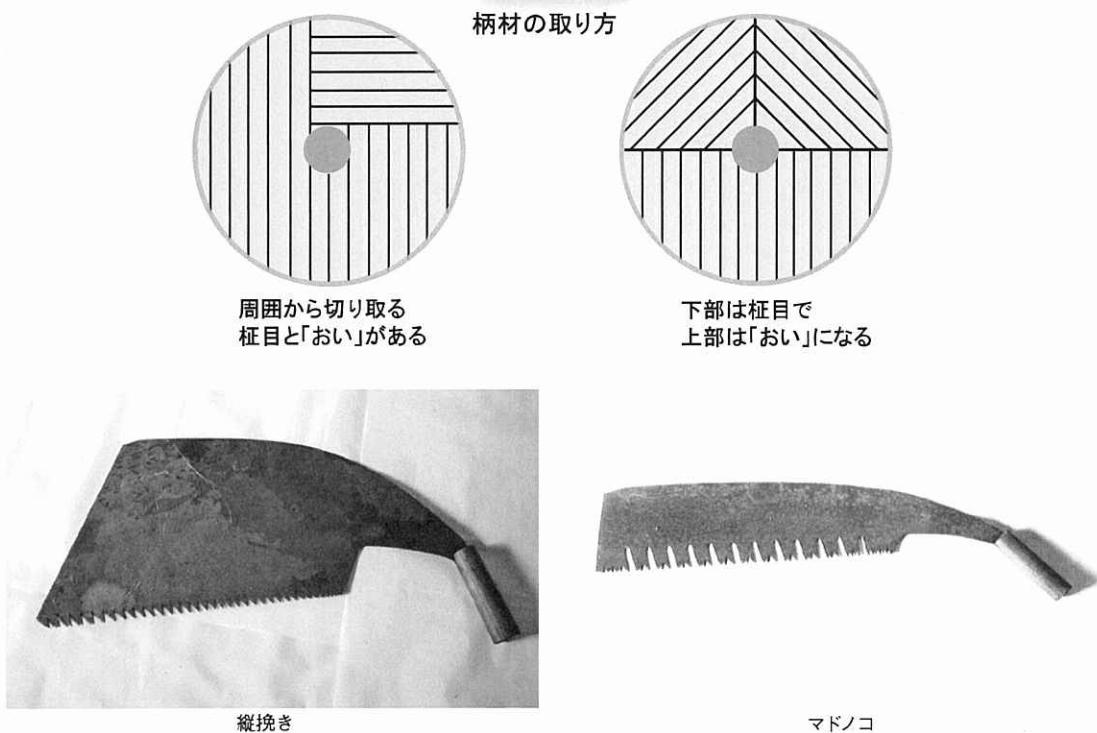
へら材



「柄材」は山で板にして運ぶ。板は縦3尺8寸
(115センチ)、横幅1尺~1尺8寸(30~55
センチ)位、厚さ3寸5分(10.6センチ)位で、
挽きかたによって柾目になる場合と「おい」の場合

がある。柄は必ずしも柾目でなくともよい。ただし、
中央の芯の部分は狂いやすいので使わない。

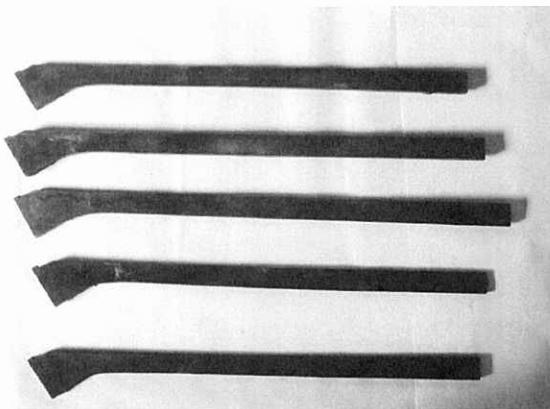
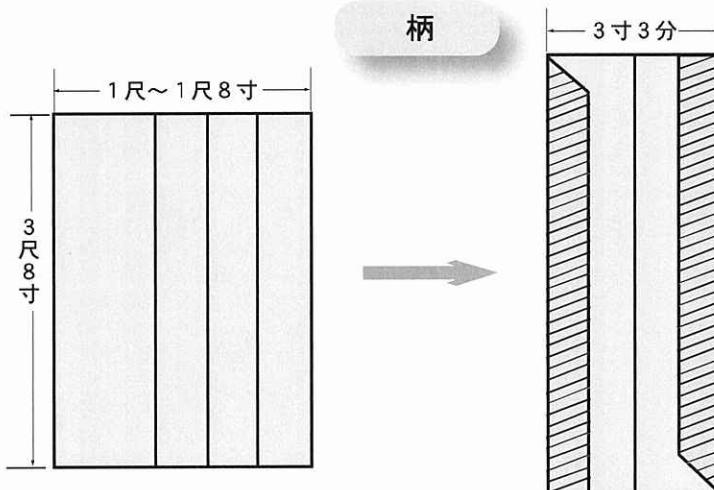
柄材



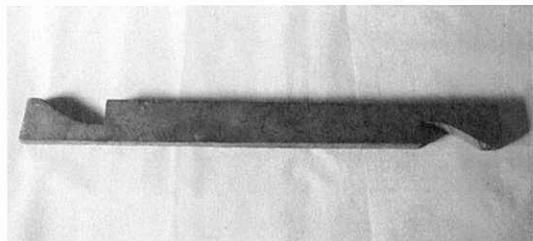
(3) 柄作り

柄用に山から取ってきた板から、3寸3分幅に切り取り、これに柄型を当てて墨をつける。
3寸巾のものから柄を2丁とる。最初は手マサカリ

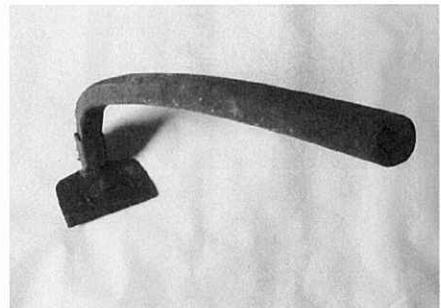
で荒削りをして、次にノコギリで挽く。こうして荒削りの柄ができるが、柄の先端は手斧で、握る部分はナタで削って荒仕上げをして乾燥に送る。



柄 型



柄 材



ちょうな（柄の曲がった部分を削る）

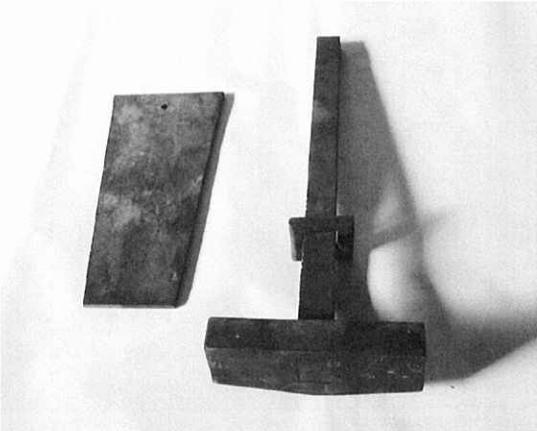
(4) 乾燥と仕上げ

荒仕上げをしたものは、囲炉裏の上のひだなに上げて乾燥させる。乾燥すると丸鉈や平鉈で削り、最後に紙ヤスリで擦る。

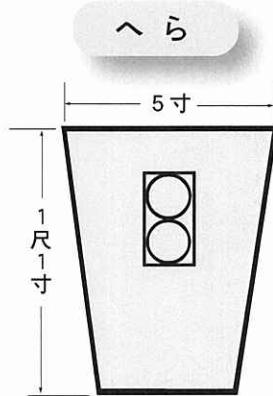
外側へ膨らませるのがコツだという。へらの中央嶺は盛り上がっているので、その部分の細工は熟練を要する。

(5) へら作り

へらのでき上がりは1尺1寸で、中央部に穴をあける。穴をあける場所はへら型を当ててきめ、2ヶ所に直径1寸の穴をあけ、さらにのみで削る。穴は若



へら型



へら

(6) 柄通し

へらに柄を付けるには、柄の上方から入れてやる。へらの通りが悪いときは、柄の先の方を叩いて入れてやるとよい。一般には柄つぼのところにクサビを打つが、市野々では打たないのが特徴で、それだけ柄が抜けないようにする細部の技術は難しく、柄通

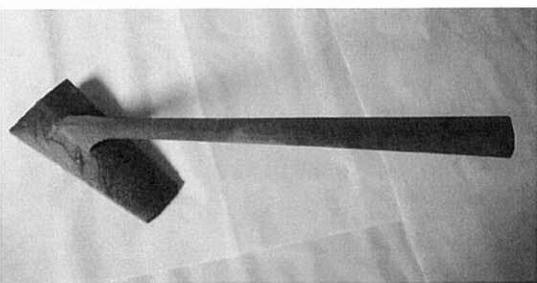
しもまた熟練を要した。へらにヒビを入れないで1荷（42丁）作るには数年の経験が必要であったという。上手な人は一日一荷を通し、荷造りまで済ませることができた。

(7) 出荷

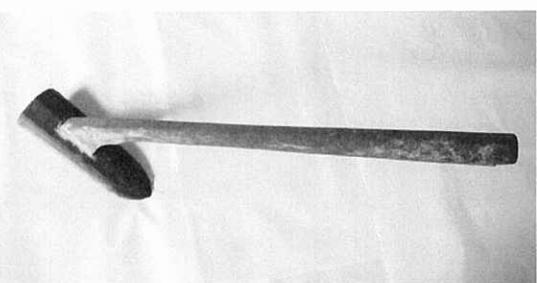
1荷（42丁）を18丁と24丁に分けて荷造りした。値段は大正初期で1荷4円で1荷作る手間は8人とみていたから、1人前50銭になった。この頃は黒沢峠を越え、松岡を通って金丸まで背負い出し、そこで中条の商人に売り渡した。

昭和初期になると、小国渡しで値段も15円と高く

なった。1軒でひと冬の出荷量は最高20荷位で、1本の原木からは、約10荷の鍬柄が作られた。したがって、原木はせいぜい2~3本あれば間に合つたわけである。それにしても、1荷15円として、20荷で300円であるから、当時としては相当の収入であった。



鍬柄（出荷品）



鍬柄（鍬先を取り付ける前）



鍬（鍬先を取り付けた完成品）

◆蓑（みの）作り

蓑は、雨具用の「毛蓑（けみの）」と荷背負い用の「荷蓑（にみの・ゴギみのともい）」の二種類がある。

毛蓑は、年中を通して雨や雪から身を守るために用いられる雨具。

「おつかわ」や「ひろい」が材料で雨水が流れるよう縦に編まれ、肩から背中と足まで覆う。ゴムやビニール製の雨合羽が普及するまで、どこかの家にも男女用で大きさの違うものが数着あつた。

雨の日の農作業は頭に昔の笠をかぶり背に毛蓑を着て出かける。毛蓑は雨具とはいっても背の部分だけしか覆われず、前の部分は何も着けていないので当然濡れる。

重い荷を背負うときは荷蓑を着るが、雨の日の草刈りや柴刈りなどは毛蓑を着て荷を背負った。

使つて濡れた蓑は「蓑かけ」にかけて干す。「蓑かけ」は細木の又になつた部分を切つてかぎを作り戸の口やとおりの壁に打ち付ける。蓑を傷めるので釘には掛けない。

毛蓑は生活必需品で冬場の仕事としてどこの家でも作った。一着作るのに三~四日かかりできばえもさまざまで悪いと「めこがえがむ」とか

「べこほえる」などと馬鹿にされた。

新しく作ると三~四年は持つた。

また、新しく作るとそれを他所行き用にして、家作事用と区別する人もいた。

荷蓑は、荷物を背負うとき肩や背中が痛くならないように着る。材料は「打ち藁」と「おつかわ」で、形は荷の当たる背中部分を覆うだけで狭いが厚く頑丈にできている。重さも三~四キロになり、着ているだけでも負担になる。

表の部分は全体が蓑の黄色に、周りが「おつかわ」の黒や茶色、中央部には布切れを使って模様や屋号、家紋を編みこみ、脇は蓑の切れ目がきちつと揃い仕上がりはまことにきれいである。

乾し草などがさの大きいものを背負うときは、蓑の上に「やせうま」を載せる。

田んぼの畔道や山道など道路事情も悪く、農業が手作業の時代は物の運搬は背負うことが多く、荷蓑も必需品でどこの家にも数着あつた。

以下、その作り方について記述する。

1 蓑の作り方

材料は「ひろい」を土台に「おつかわ」を上にかぶせるように「みご縄」や「あさ縄」で編んでいく。

最初は「首かき」を編むことから始める。首を包みしっかりと身体に押さえる役目があり、最も大事な部分である。当て型はないので勘で加減しながら編む。この「首かき」で形が決まり、でき上がりに大きく影響する。

次に「表編み」で、表面の雨が当たる部分を「ひろい」に「おつかわ」を挟みながら編む。雨が中に染み込まないように、そして目につく部分なので見栄えもよくする。

最後は「裏編み」、身体に当たる部分で編み目を揃えるため「目押し」を使って編む。

「首かき」「表編み」「裏編み」の3工程で作り、仕上げまで約4日間かかる。

(1) 首かき

【材料】

「ひろい」と「おつかわ」「布切れ」でかきつける材

料

編み細縄には、「みご縄」や「おつかわ縄」「麻糸縄」など

【作り方】

右前から右肩、背を回り左肩、そして左前まで、着



たときに首の回りをちょうど良く囲むようにU字形に編み上げる。

かきつける長さは、約60センチで男女や背丈によって加減する。

さば口を付けた2本の「細縄」を芯にしてかきつけるので「首かき」という。

(2) 表編み

【材料】

「おつかわ」

編み紐は、「みご」や「麻糸」

工具として、首のU字形を固定するのに八番線を使う。

【作り方】

材料の「ひろい」の先端が表になるように編んでおり、「首かき」でできたU字形の内側から約10センチの外まわりまで、5回りほどをしっかりと編み上げる。

(3) 裏編み

【材料】

「おつかわ」と「ひろい」

編み縄は、「みご」や「麻糸」

工具として、編み目を揃えるため「目押し」を使う。

【作り方】

「首かき」で「ひろい」の根元が出ている方を、裏にして編み下げにする。

7センチほどのところを「縄編み」にして、編み目を「ひろい」に差し込んで、また7センチほど下を「縄編み」にする。

1回り目には、「おつかわ」を挟みながら「みつぐり編み」をする。

2~4回り目には、普通の「縄編み」にする。

5回り目には、また「みつぐり編み」で、背の部分に「おつかわ」を挟み込み、ぴったりと「縄編み」で補強し終わる。



毛蓑の首型

3段ほど下げるとき、表の「ひろい」の長さと揃うので、1段ずつ2回の袖下げをして、6段目で腰幅を決める。ここからさらに5段ほど下げるとき、「ひろい」に「おつかわ」を混ぜたりして、差した根元をしっかりと「縄編み」にしておく。

最後の段にも、「おつかわ」を混ぜて裾を補強しておく。

裾は5センチと3センチの程度の間隔で、2回「縄編み」をして止める。

2 荷蓑の作り方

材料は「打ち藁」を土台に、「おつかわ」や「布切れ」を使い、「毛蓑」と同じように「首かき」「表編み」「裏編み」の順に編む。

重いものやゴツゴツした硬いものを背負っても痛くないよう、そして形が崩れないよう、「打ち藁」を1寸くらいの厚さに「みご縄」や「麻糸縄」でしっかりと編む。

(1) 首かき

【材料】

「打ち藁」と「おつかわ」「布切れ」、かきつける材料
編み細縄には、「みご縄」や「おつかわ縄」「麻糸縄」など

【作り方】

「さば口」を付けた2本の「細縄」を芯にして、「打ち藁」をかきつける。右前から、「毛蓑」の「首かき」の要領でかきつけるのだが、根元の方が蓑の表になるように組む。

「毛蓑」のU字形に対して、「荷蓑」は「長コの字」形で、蓑を着たときに首の後ろは密着しないように作る。



荷蓑 ゴギみのともいう

(2) 表編み

【材料】

「打ち藁」と「おつかわ」「布切れ」など

【作り方】

「首かき」をした背の部分に11本の「編み縄」を80センチほどの長さに下げる。

「編み縄」を芯にして60センチほどを横編みする。左右の両端には回り編みの芯を作る。横編みでは、文字や模様を入れることができる。編みながら回り編みの芯を作る。終わると「みつぐり編み」をして区切りをつける。

回り編みは幅5センチほどになるまで、右回りから戻って左回り、また戻って右回りと繰り返す。必要な幅ができると、「みつぐり編み」で「おつかわ」を

(3) 裏編み

【材料】

「打ち藁」と「おつかわ」

編み紐は、「みご」や「麻糸」

【作り方】

編み下げは6センチ幅ほどに7段ほどで表の丈に合わせる。

付ける。それにもう一度縄編みを付ける。
一番下に、「尻当て」作り、表編みは終わる。

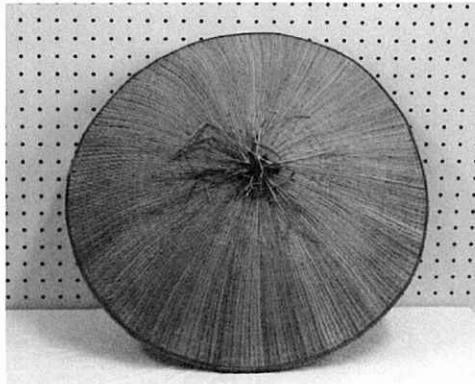
3 材料の準備

(1) おつかわ

「おつかわの木」の皮を剥ぎ取り、表皮を除き内皮を陰干しにする。

剥ぎ取る時期は、5月から9月頃まで。夏の間は剥がれ易い。

使う前に、熱いお湯に浸して柔らかくすると、数枚に「へだえ」ごとに分けられ、しなめきが出て使い易くなる。



菅 笠

編み目に「打ち藁」を差して編み下げるのは、「毛蓑」の編み下げと同じ要領。

下げ終わったら、3センチほどの間隔で外周を縄編みする。

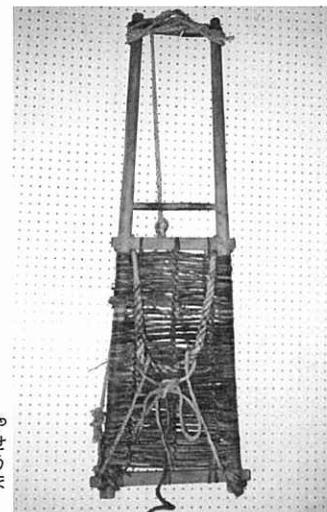
最後に、尻当てに合わせて裏も下げる。

(2) ひろい

山の道端や岩下の地味の肥えた所に、株立ちとなり自生している、1尺7~8寸の細い藁状の草で、水に濡れても強い。

「くわがの」の下草によくある。

長いものを選んで抜き取り、天日に干す。



針金やビニールロープなど、今は簡単に手に入るが、昭和時代の中頃は茅葺き屋根の骨組みからかんじきの緒まで、物をしばつたり吊るすのはすべて稻藁などを材料に手で編み綱を使っていた。

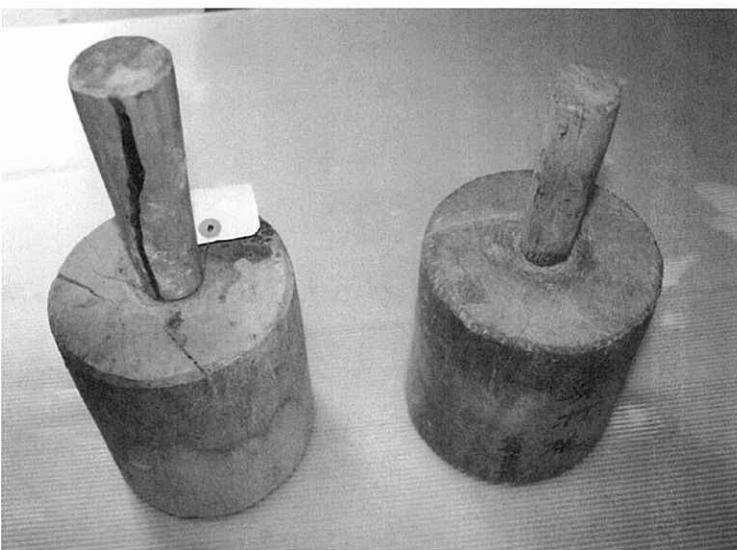
それら用途に応じたさまざまな綱があり、材料や綱いかた、使う方法など各集落や家々に代々受け継がれてきた。

綱の材料は主に稻藁である。秋に刈り入れし脱穀の時、長めで色の良いものを選び分けて別に積んでおいたものを使う。藁以外でも、用途によつて細くしたり特に丈夫にしたいときは、木の蔓や麻、岩すげなどいろいろの材料を用いた。

綱は農閑期の冬場に一年分を編みた。冬は積雪のため外での農作業は全く行なうことができず、仕事といえば一部の家では炭焼きや木材の切り出しなどに携わっていたが、三メートルにも積もつた雪の処理がたいへんで毎日それに費やされ、その他は米俵や筵などの藁仕事や牛の世話を忙しく、綱縄いは主に夜わりに行われた。

◆ 縄縄い

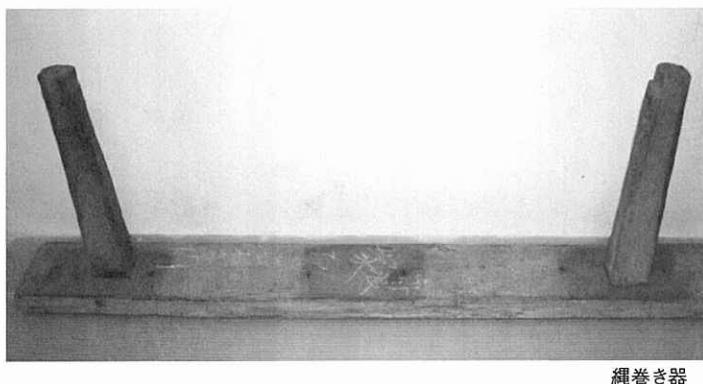
綱縄いは稻藁の葉にあたるハカマ



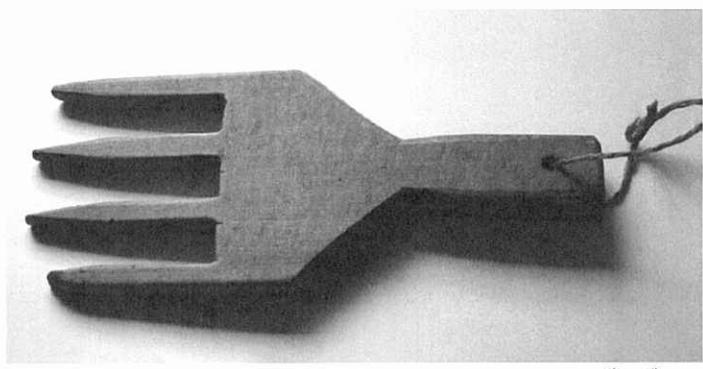
藁ぶちつつ

タヤの木や八番線六～七本を歯に付け、それでこくるのである。仕上がりたわらは「すぐり藁」という。その時に出る藁屑の「ハカマ」は柔らかないので「藁フトン」に詰めたり、厩のぶつ込み用に使う。

次に「ハカマ」が取れてきれいに揃つた「すぐり藁」を三把か四把束ね、二ヶ所結び、それを打つ「藁打ち」である。柔らかくして絹い易くするのとでき上がった縄を丈夫にするための大切な作業である。「とお



繩巻き器



藁ムグリ

を取り去つてきれいに揃える、「藁すぐり」から始まる。一把を取り出し、バラバラにならないよう藁先の「みご」の部分をねじつて左手でしつかりと持ち、右手を櫛のようにして下の茎の方から「ハカマ」を取る。幹にあたる「稈（かん）」だけにする作業で、右手が擦れて痛くなるので、「藁すぐり」の道具を使つた。これは熊手を小さくしたような形で櫛の根元五寸位に細く削つたイ

り」の土間に丸い石を頭の部分を出して埋め叩き台にする。そこに束ねた稻藁を載せ、上から「藁ぶちつつ」で打つ。柔らかくなるまでひつくり返しながら、あまり力を入れて打つでなく「藁ぶちつつ」の重さを利用し丹念に打つ。特に根に近い硬い部分と節は、硬いと折れやすいので柔らかくなるよう念入りに打つ。冬の最も寒い時期暖房も通らない土間でも汗ができるほどであった。適当な柔らかさに仕上げるがあまり打ち過ぎると人もいた。一把打つて一錢～二錢、途中で束の芯と外側を入れ替えて丁寧に打つので柔らかくて絹い易く、しかも丈夫であつた。

材料ができ上がるといよいよ絹う。

あぐらをかいて座り最初は茎の部分を重ね絹い始める。でき上がつた部分を後ろに送り、しつかりと尻に挟み両手で縄（よ）つていく。太さが一定になるよう左右に打（ぶ）ち藁を数本ずつ足しながら絹つていく。

手は打ち藁と擦れて痛いが何日も続けると胼胝（たこ）になつて痛さは感じなくなる。太さを一定にして縄り目をきれいに仕上げるには熟練を要した。

縄は両手を広げた長さを「一尋（ひとひろ）」といい、三十尋で「一把（いっぽ）」十二把で「一束（いつそく）」と数えた。一晩で一把絹えれば一人前であった。

荷縄や「わらじ」の結び縄などきれいで仕上げる縄は、周りに付いた

屑を取るため炎の上を通す「毛やじり」を行い、その後仕上げに、打ち

藁を束ねたわらを使って「こくり」をかけた。

昭和三十年代になると、機械で繩

を絹う製繩機（せいじょうき）が集

落の数軒に入つてきて商売をするようになつた。この機械は藁を入れるラッパを調節することにより「二分繩」から「四分繩」まで作り分けることができ、能率が良くて仕上がりもきれいである。

各農家でも勤めるようになり兼業化が進むと頼むようになつた。また、その頃からビニールやナイロンなど作られたロープや紐が手に入るよ

うになり、繩を絹つて使う人は減つていつた。

以下、当時使われていた繩を材料

や用途別に分けた。

●人の手で絹う繩

1 材料が稲藁の繩――

(1) 素藁（すわら）の繩

藁で繩を作る場合、通常はすぐつた藁を「わらぶちつつ」で打ち柔らかくして絹うが、神仏や祭事に使用する場合、その他、雑な繩で良い時は簡便方法として、打たないで素藁のままで絹う。これを「かつつか繩」

という。

①かつつか繩

藁打ちをしない素藁を使って絹つた繩、用途により太さもさまざま。

【用途】

ア、仏事や神事に使う場合、神聖なものとして細工のされていない素のままの稻藁を使う

葬式の「位牌持ち」は「わらじ」、その他は「あしなか」を履くが、それらに使う繩も「素藁」である

イ、秋に収穫した豆を乾燥するため、南向きの壁に棚を組み豆枝を並べかきつけるが、素藁で絹つた細い「こで繩」を使う

ウ、干し大根を編むのは、二分五厘の普通の素藁で絹つた繩を使う

(2) 打ち藁の繩

すぐつた藁を「藁ぶちつつ」で何回も打ち、柔らかくしてから絹う通常の藁繩。

①ここで繩

打ち藁を片方一本か二本で絹う細い繩で、編み上げるものや細やかな細工に使う。藁の先のつなぎ目はしつさを「一尋（ひろ）」かりと縫り、あとはさらつと縫る。

【用途】

ア、「かます」を織るときの、縦繩

ウ、「肥背負かご」などの編み材とくに使う
ア、嫁入り道具の簾笥や長持ちを運んで使う

②手繩

一般にいう繩のこと、藁を片方三本から四本で縛る。太さは二分五厘から三分。

【用途】

ア、ハセを吊るときの縦杭、横杭、つっぱりをしっかりと固定する、「ハセ繩」として使う

イ、雪廻いは雪で窓や壁が傷まないよう家の周りに枠を作りそこに茅や藁を当てしっかりと押さえた。

その縛る繩「かこいなわ」に使う

ウ、柴や薪などを束ねる結束用として使う

エ、建物建築の足場組み用として使う。住宅の新築祝いに「手繩一束」を持っていったこともある

オ、茅葺き屋根の葺き繩として使用する

②ここで繩

繩を数える単位は次のようであつた

・手に持つて両手を大きく広げた長さを「一尋（ひろ）」

・三十尋で「一把（いっぽ）」

・十二把で「一束（いつそく）」

③こぐり繩

ア、匂炉裏で鍋などを下げる「かぎ」用の繩として使う

イ、つるベ井戸の「つるベ繩」とし

て使う

て「こぐりこ」を作つて包み、何度も擦つて磨くと表面の藁屑が取れてきれいに仕上がる。特に大事なものや催事などに使う化粧繩。

【用途】

ア、荷車などの荷付け用として使う。繩の頭には「さば口」を付ける

イ、ハセの二段目や四段目の力のあまりからならない場所に長木（ながき）の代わりに使う

ウ、背負子の縛り繩として使う

④みつぐり繩

繩は通常二つのたばを両手で縛つて作るが、「みつぐり」は更に同じ太さのたばをもう一つ手で縛つていく。

手間はかかるが丈夫で見た目もきれいである。長年使う箇所や神棚などに使う。

【用途】

ア、荷車などの荷付け用として使う。繩の頭には「さば口」を付ける

イ、ハセの二段目や四段目の力のあまりからならない場所に長木（ながき）の代わりに使う

ウ、背負子の縛り繩として使う

⑤よつぐり繩

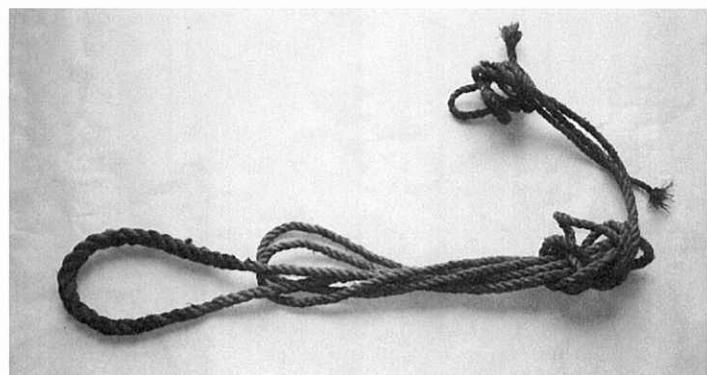
「みつぐり繩」にもう一つ縫りをかけた「よつぐり繩」もあって、さらには頑丈さが必要な箇所に使つた。

【用途】

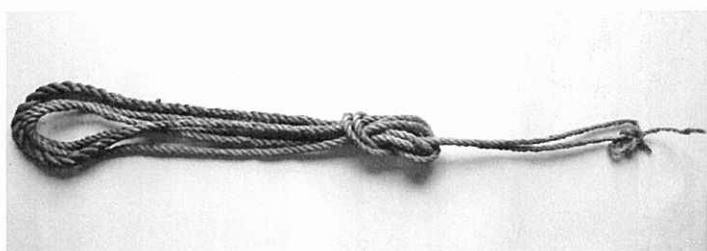
ア、匂炉裏で鍋などを下げる「かぎ」用の繩として使う

イ、つるベ井戸の「つるベ繩」とし

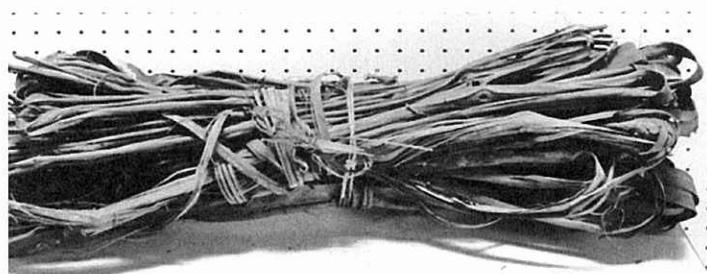
て打ち藁を縛るのに使つた藁を丸めて使う



荷縄(首縄に布を縫り込んだもの)



荷縄(首縄におっかわを縫り込んだもの)



おっかわ

(6) 荷縄
縄の綻りかたは「みつぐり」であるが、荷を背負うとき専用に作られた繩で、使いやすいように工夫されており。長さは五尋ほどで中央部の一尋は太くなつており「首縄」と呼び、その先「中縄」から先端部に行くにつれて次第に細くして端を結び止める。中央の太い部分には丈夫にするため布や「おつかわ」を縫り込んでいた焚き木を山から出すとき、ソリい力を入れて縫う。仕上がりが良い

ア、蓑を着て木や草、稻、生活用品などの荷物を背負うときに使う
⑦ もとち「綱」
「みつぐり縄」で同じ太さにして長く縫い、ロープとして使う。
【用途】

荷縄は手で持つて立てる事ができるた。

ア、ソリを引く専用の繩で、春の「肥引き」や「木出し」に使う
2 材料が藁以外の繩――

稲藁であるが、穂の付くところの「みご」だけを抜き取つて材料にする。「みごぬき」は手間の掛かる仕事で、「みご」の部分を揃え、茎を足で踏んで押さえ四つ五本ずつ抜き取る。

直径三〜四寸を束にして、「藁ぶちつつ」で打つが、強く打つと割れるので時間を掛けて丁寧に打つ。それ

端をソリにくくり付ける。相当な重量が掛かるので「みつぐり縄」でしっかりと縫つた。また水分を含むと弱くなるので夕方家に持ち帰り、「ひだな」に下げて干す。

【用途】
ア、「てんご」「米俵」「たながっこ」などの編み繩に使う
イ、「蓑」の編み繩に使う
ウ、「すぐれ」の編み繩
＊「たながっこ」藁を編んで縫五寸、横一尺五寸、高さ一尺位の直方体に作った入れ物、種糉や小豆、豆など雑穀類の種を保管する

(2) 岩すげの繩

「岩すげ」を刈り取つてきて乾燥し手繩とした。「すげ」には「本すげ」と「岩すげ」があり、「本すげ」は茅蘆(ござ)を織る材料になり、「岩すげ」は繩の材料に使われる。

「岩すげ」は日干しにして根元の部分のみ何回か大きな石に叩きつけながら乾燥していくと柔らかくて、絹うにも手が痛まず、そして長いのではかかる。

葺き屋根の葺き縄として使う。

市野々では、共同の「岩すげ」刈り場があり、総会で「岩すげの口開け」の日を決め一斉に刈った。毎年お盆前の八月十日頃である。

【用途】

ア、ハセを組み立てる「ハセ縄」として使う

イ、茅葺き屋根の葺き縄として使う

(3) みつかど縄

「みつかど」は田んぼの畔などに自生している草で、それを刈り取り乾燥し、それを打つて柔らかいしたものを使つ。

「みつかど縄」は「みご」と同じようく細く丈夫で、使われ方も同じである。「みつかど」は刈り取つてすぐ使えるので便利であるが、生えていいる場所が少なく田んぼの畔に見つけるとそこを残して草刈りをした。

【用途】

ア、「てんご」「米俵」「たながつ」などの編み縄に使う

イ、「蓑」の編み縄に使う

3 栽培した材料で作る縄――

(1) 麻縄

現在は麻の栽培は禁止されているが、当時は糸を取つたり、実は食料にと重宝な植物でどこの家でも作つてい

た。

前年の秋に採つておいた種を春に撒き、夏に刈り取つた。それを水の張つた苗代に漬け浮かび上がらないよう上からハセ木で押さえた。一ヶ月位経ち秋になると水から上げ皮を剥ぐ。

ア、ハセを組み立てる「ハセ縄」として使う

イ、茅葺き屋根の葺き縄として使う

(3) みつかど縄

「みつかど」は田んぼの畔などに自生している草で、それを刈り取り乾燥し、それを打つて柔らかいしたものを使つ。

「みつかど縄」は植物繊維の中では一番丈夫で細い縄にも加工できだし、見た目も真っ白できれいなので多くの使われ方をした。

【用途】

ア、「みご縄」より丈夫で細縄として使う

イ、「蓑」や「荷蓑」(ゴギミの)

ア、「みご縄」より丈夫で細縄として使う

イ、「毛蓑」や「荷蓑」(ゴギミの)

植物で、下叶水の明神原にあつた。

また苧麻畑に栽培する家もある。「手

鎌」で刈り取ると、翌年またそこか

ら生えてきた。麻と同じような方法で糸を取り出して縄にする。

縄は黄色く丈夫で麻と同じように使われるが、水に対しても麻よりも強く扱われる。

く投網(とあみ)の糸にも使われる。

の「まだの木」を切つて皮を剥ぐの

に「しほりまだ」と「つけまだ」の二通りがある。「しほりまだ」は切つたその場で皮を剥ぎ、さらにしほりながら硬い表皮を剥ぎ取る。揉めてばやはやになるが乾燥しても硬くならず強い。取り出すのに手間が掛かるがこれだけで剥つた「荷縄」は最上級である。「つけまだ」は木を水に浸けておき、皮を剥ぐ方法で簡単に剥がれる。

ア、「みご縄」の糸に使う

(3) あかだ縄

「あかだ」は山野の沢の傍などに「株じ」となつて生えている草で山菜のアイコに似ている。背丈は一メートル位になる。秋の葉が落ちる頃、鎌で刈りその場で葉をきれいに取つて持ち帰る。大きな「すえがま」と「せいろ」を使って蒸かすと皮が簡単に剥がれる。

板にのせ木のへらでこくり、表皮を取りきれいに仕上げ、直徑五分位に丸けて乾燥する。麻糸より少し硬めの糸ができる。

【用途】

ア、「しほりまだ」の荷縄

イ、荷縄の首かき

(2) 萩麻(からむし)縄

「萩麻」は山野に自生する多年草の

植物で、下叶水の明神原にあつた。

また苧麻畑に栽培する家もある。「手

鎌」で刈り取ると、翌年またそこか

ら生えてきた。麻と同じような方法で糸を取り出して縄にする。

縄は黄色く丈夫で麻と同じように使われるが、水に対しても麻よりも強く扱われる。

く投網(とあみ)の糸にも使われる。

の「まだの木」を切つて皮を剥ぐの

に「しほりまだ」と「つけまだ」の二通りがある。「しほりまだ」は切つたその場で皮を剥ぎ、さらにしほりながら硬い表皮を剥ぎ取る。揉めてばやはやになるが乾燥しても硬くならず強い。取り出すのに手間が掛かるがこれだけで剥つた「荷縄」は最上級である。「つけまだ」は木を水に浸けておき、皮を剥ぐ方法で簡単に剥がれる。

ア、「しほりまだ」の荷縄

(1) まだ縄――

まだの木(科の木)の皮を剥いで、細く裂いて縄う。山で直径三~四寸の「まだの木」を切つて皮を剥ぐのに「しほりまだ」と「つけまだ」の二通りがある。「しほりまだ」は切つたその場で皮を剥ぎ、さらにしほりながら硬い表皮を剥ぎ取る。揉めてばやはやになるが乾燥しても硬くならず強い。取り出すのに手間が掛かるがこれだけで剥つた「荷縄」は最上級である。「つけまだ」は木を水に浸けておき、皮を剥ぐ方法で簡単に剥がれる。

ア、「しほりまだ」の荷縄

イ、荷縄の首かき

(2) おつかわ縄

「おつかわ」の木の皮を剥いで細く裂き、縄にした。丈夫で細い縄にして「みご縄」と同じように使う。

【用途】

ア、「てんご」「米俵」「やっこ俵」

などの編み縄に使う

イ、「蓑」の編み縄に使う
ウ、「荷縄」の補強用として使う

(3) 藤蔓(ふじつる)縄

藤蔓の表皮を剥ぎ取り、内皮を取りそれを打って柔らかくし縄にする。使うのはたいへんだがとにかく丈夫で、藁縄では押さえきれない場所に使う。

材質によつて「きふじ」と「わたふじ」に分けられ、「わたふじ」は皮が厚く量がたくさん取れるが、なかなか当たらなくてほとんどが「きふじ」である。

春先、雪の上を歩いて山へ行き、「三メートルも枝無しで真っ直ぐなところを切つてくる。それを「藁ぶちつつ」で打ち柔らかくする。

【用途】

ア、木出しソリのブレーキとしてそれに乗つて使う「しくさ」に使う

5 紐

【用途】

傘や蓑など身に着けるものや小物を結ぶ紐もいろいろ作られた。材料は同じであるが縄よりも細くきれいに仕上げて紐を作る。

- ①みご紐
- ②麻紐
- ③苧麻紐

④まだ紐

⑤おつかわ紐

う。「横結い」には四分縄、「棧俵(さんだわら)」を押さええる「かがり縄」には三分五厘縄を使う

●製縄機(せいじょうき)

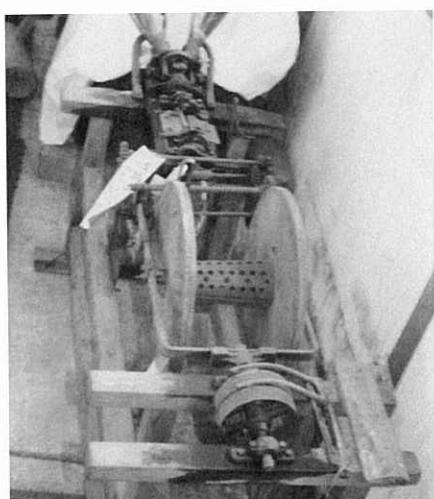
機械縄はすぐつた藁を打たないでそのまま二ヶ所のラッパ口から数本ずつ入れた。出来上がつた縄は円筒状になり「玉縄」と呼んだ。手で絆つた縄よりは締まらず弱いが太さも一定で絆うのが速かつた。

1 機械縄

材料は稻藁であるが、岩すげを使つたこともあつた。太さも入り口のラッパを調節することにより規格に合わせることができる。

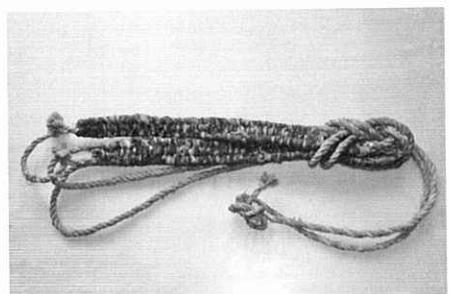
太さの規格

- ①二分縄
- ②一分五厘縄
- ③三分縄
- ④三分五厘縄
- ⑤四分縄



製縄機

注	一尺	三十センチメートル
	一寸	三センチメートル
一分	三ミリメートル	○・三ミリメートル



背負い縄



木出し用もとち